

令和2年度

# 幼児教育のあゆみ

その46

高知県国公立幼稚園・こども園会



令和 2 年度

# 幼児教育のあゆみ

その46

高知県国公立幼稚園・こども園会

## はじめに

令和2年度の高知県国公立幼稚園・こども園会、園長部会、主任等部会の事業報告及び4支部の研究成果のまとめとして、研究集録「幼児教育のあゆみ その46」を発刊することとなりました。

本年度は、「新型コロナウイルス感染症」が日本だけでなく全世界に猛威をふるい、予測困難な時を過ごすこととなり、当たり前の日常のありがたさを改めて感じさせられた一年でした。県下はもとより全国規模の研究会まで、例年のように一堂に集まっての活動は行うことができませんでした。しかし、そのようななかでも、各支部・各園におきまして、工夫し研究に取り組んでまいりました。例年以上に、会員の皆様のご支援とご協力に心より感謝いたしますとともに、この1年の皆様の熱心な取り組みがそれぞれの園の子どもたちの成長へとつながり、次年度の実践や研究にいかされることを願っています。

かつてない対応が求められる状況のなかであっても、教育の本質を見失うことなく教育の灯をともし続けるという国公立幼稚園・こども園の役割を自覚し、安心・安全な園運営と、子どもたちが未来を切り拓く力を育むことができるよう質の高い幼児教育の実践に努めたいと思います。そして、この難局を乗り越え一日も早く平穏な日々が訪れることを切望しております。

終わりに、研究推進にあたり、ご支援ご協力賜りました高知県教育委員会、各市町村教育委員会をはじめ各関係機関、並びにご指導いただきました諸先生方に厚くお礼申し上げます。

令和3年3月

高知県国公立幼稚園・こども園会 会長 西 田 佳 代

## 祝 辞

高知県国公立幼稚園・こども園会の皆様のご努力と優れた研究の積み重ねにより、このたび「幼児教育のあゆみ46号」が発刊されることを心からお喜び申し上げます。

皆様方が熱心に取り組んでこられた研究の成果は、本県の幼児教育の充実とともに、保育者の資質向上につながるものであり、日々、研鑽を積まれておられますことに敬意を表します。

平成30年4月より施行となった幼稚園教育要領等では、幼児期の教育から小・中・高等学校までを見通して育成を目指す資質・能力が示され、多様な体験に関連して、幼児の発達に即した主体的・対話的で深い学びが実現できるよう、指導計画の作成と、幼児理解に基づいた評価がさらに重視されるなど、全ての保育者の資質・指導力の向上とともに、幼稚園教育要領等に基づく幼児教育の充実がますます求められています。

高知県教育委員会では、令和2年3月に策定された「第2期教育等の振興に関する施策の大綱」いわゆる「第2期教育大綱」と、それを具体的に実践するための「第3期高知県教育振興基本計画」の中で、「就学前教育の充実」を位置づけ、教育・保育の質の向上に取り組んでおります。

その取組の一環として、園内研修支援はもとより、園の教育・保育活動とその他の園運営の状況について評価を行い、その結果に基づいて、園及び設置者等が園運営の改善を図ること、評価結果等を広く保護者や地域社会等に公表していくことが求められていることから「保育所・幼稚園等における園評価の手引き」や「指導計画・園内研修の手引き【改訂版】」などを作成しました。

質の高い幼児期の教育は、幼稚園教育要領等に基づいた園評価を適切に実施し、組織マネジメントを効果的に推進する仕組みを構築することなど、生涯の人格形成の基礎を培う重要な時期を担う教員の皆様方の自らの力量を高めようとする意識・意欲と、研究の積み重ねから生まれてきます。今年度の高知県国公立幼稚園・こども園会の研究については、新型コロナウイルス感染症予防対策のため、教員の皆さんが集っての研究がままならず、例年のような方法での研究が進められなかったことと思います。しかし、新しい生活様式に沿った方法を見い出しながら、各園や支部での研究を深められ、その研究は、幼児一人一人の発達を踏まえながら計画的・意図的な保育を行い、子ども理解に基づき自らの実践を振り返る質の高い内容となっており、本県の幼児教育の向上に大きく寄与するものと考えております。

高知県国公立幼稚園・こども園会におかれましては、子ども一人一人の健やかな育ちを保障するため、今後も、幼児教育の先進的な研究、実践を積み重ねられ、本県の幼児教育を先導する役割を担っていただけることを期待しております。

結びに、高知県国公立幼稚園・こども園会の今後ますますのご発展と会員の皆様方のご活躍を心から祈念いたしまして、お祝いのことばといたします。

令和3年3月

高知県教育委員会事務局 幼保支援課長 戸田京子

## 目 次

○はじめに	高知県国公立幼稚園・こども園会会長 西田 佳代	
○祝 辞	高知県教育委員会事務局 幼保支援課長 戸田 京子	
I. 令和2年度高知県国公立幼稚園・こども園会	事業報告	1
II. 令和2年度高知県国公立幼稚園・こども園会	園長等部会事業報告	5
III. 令和2年度高知県国公立幼稚園・こども園会	主任等部会事業報告	6
IV. 令和2年度高知県国公立幼稚園・こども園会	研究部	7
○東部支部		9
○高知支部		24
○中部支部		27
○高岡支部		45
編集後記		61

# I 令和2年度高知県国公立幼稚園・こども園会 事業報告

## 活動方針

令和元年、幼児教育・保育の無償化が始まり、幼児教育が社会の注目を集めている。しかし、話題の中心が保護者の費用負担軽減であり、子ども・子育て支援新制度の本来の目的である幼児教育の質の向上について、地域・保護者・関係諸機関をはじめ社会全体に十分認知されていない現状がある。

このことを踏まえ、全国国公立幼稚園・こども園長会は、日本の公教育・学校教育の始まりとしての全国各地の国公立幼稚園・こども園の存在意義や重要性を社会に認知されるよう働き掛け、幼児教育が一層の発展を遂げていくことが大切である。

本会は、「環境を通して行う教育」「遊びを通しての総合的な指導」という幼児教育の基礎・基本に沿った実践を通して、日々、質の高い教育の実現を目指している。また、幼稚園教育要領等の理念を具現化した実践を発信することで、日本の幼児教育全体の質の維持・向上に努めている。本会の活動は、子どもたちが未来社会を切り拓くための資質・能力とは何かを社会と共有し、連携する「社会に開かれた教育課程」の実現を図り、次代を担う人間性豊かな国民の育成を目指すとともに、国際社会において信頼される日本人としての素地を培うため、学校教育の基本に基づく望ましい幼児教育の実現に寄与するものである。

幼児を取り巻く社会は、生産年齢人口の減少や情報化が進み、急速に生活の在りようが変化する中、Society5.0時代を迎えようとしている。保護者の価値観の多様化、核家族化が進み、限られた人間関係の中で子育てをする家庭が増加し、虐待や育児放棄などが社会問題となって久しい。

幼児は、家族をはじめとする身近な大人の愛情に包まれ、心の安定を得ることによって自分のよさや可能性に気づき、意欲や自信をもって主体的に生活できるようになる。保護者が子育ての第一義的責任を有していることを自覚し、子どもに愛情を注ぎ、子育ての喜びを地域社会のつながりの中で感じることができるようになることが喫緊の課題である。これらの今日的課題を受け止め、幼児教育において、予測できない変化に主体的に取り組み、他者と協働して課題を解決し、様々な情報や知識を新たな価値につなげて、自らの目的にしていくことができる未来の担い手を育てていくことが重要である。

今こそ、全国の国公立幼稚園・こども園は、将来この国を担う人材の育成という大きな視点に立ち、質の高い幼児期の学校教育の推進・充実を目指し、本会の組織力を結集して、それぞれの地域の特性を生かした園の経営及び教育内容を充実させることが求められている。また、家庭や地域との連携を更に深めるとともに、子育ての支援を推進し、家庭や地域の教育力の向上に力を尽くしていく。

幼児教育施設が多様化する中で、幼児教育の質の維持・向上を図るには、本会の全国に及ぶ組織が機能し、つながりを更に盤石なものにする必要がある。全国につながる本会の組織は、幼児教育の諸問題に対し、実態把握を包括的に行い、結束して解決に力を尽くす。また、災害支援においても迅速にその力を発揮している。さらに、各都道府県・市区町村の幼稚園・こども園長会の活動を通して、情報の共有化、事業の活性化等、組織の強化を図り、全国国公立幼稚園・こども園PTA連絡協議会及び関係諸機関との連携を密にしてリーダーシップをとって諸課題の解決に努めていく。また、引き続き東日本大震災等での教訓を基に、教育活動の一層の充実や安全な教育施設の整備に向けて、関係諸機関への働き掛けを行う。

以上の活動方針に基づき、次に掲げる事項を本年度の活動の重点とする。

## 【活動の重点】

### 1 幼児教育の質の維持・向上とリーダーシップの発揮

- ・幼稚園教育要領等の理解を深め、幼児教育の質の維持・向上を目指して、遊びを中心とした生活の中で、体験を通して学ぶ幼児教育の本質を踏まえた指導内容・方法・教材及び評価の改善等の工夫や充実に努め、その重要性を発信するリーダー的な役割を担う。
- ・幼小の接続に関する研究、幼児と児童との交流、教員・保育者との交流や合同研修会等の中で「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有することにより小学校の教育内容との円滑な接続を推進する。さらに人事交流の重要性を行政及び関係諸機関に発信する。
- ・国公立幼稚園・こども園が地域における幼児期の教育のセンターとしての役割を一層果たし、関係各方面に働き掛け、様々な教育施設・機関との連携を推進する。
- ・学校評議員等の設置率を一層高めるとともに、学校評価を確実に進め、教育内容や成果を分かりやすい形で情報発信することに努め、園経営の充実に努める。

### 2 3年保育実施の拡大と預かり保育の充実

- ・希望する全ての幼児が学校教育としての幼児教育を受けられるよう、関係諸機関へ働き掛ける。核家族化、少子化が広がっている状況を踏まえ、3年保育実施の拡大および幼稚園における預かり保育の充実が、待機児童解消に貢献している実績を発信しつつ、幼稚園教育要領に示されている幼児にとってふさわしい教育活動としての預かり保育を実践する。

### 3 家庭や地域社会の教育力の向上と次世代育成支援の推進

- ・親子の居場所づくりや子育ての支援の推進、保育所・子ども家庭支援センター等との連携、預かり保育の充実等、地域におけるネットワークの構築を図り、弾力的な運営に努める。また、保護者が教育活動に参画できる機会を提供し、保護者の教育力を生かした園経営を推進する。
- ・PTA等の組織と連携を図り、家庭や地域との豊かなつながりの中で親子の絆を深め、親と子が共に育つ場を提供する。また、「身近な自然との関わりを通して子どもの豊かな感性を育むための調査研究」を行い、その成果や提言を情報として発信し、子育ての支援を充実させ園経営の推進を図る。

### 4 保育者（幼稚園教諭・保育教諭・保育士）の資質及び専門性の向上

- ・人権感覚を磨き、学び続ける姿勢をもった保育者を育成するために、資質及び専門性の向上を目指す研修の体系化を図り、研修体制を一層充実させるとともに、免許の上進などについても地域の教員・保育士養成課程を有する大学や幼児教育研究団体等との連携を図る。
- ・教育・保育の多様な課題に柔軟に対応できるような実践力のある保育者を育成するため、国の動向や幼児教育の重要性等、最新の情報を発信して、各園長がリーダーシップを発揮できるよう支援する。
- ・幼児教育センターや教育アドバイザーが果たす役割の重要性を訴え、研修の充実や相談機関の設置を働き掛ける。

### 5 教育・保育の充実のための条件整備

- ・保育者が仕事と生活を両立させ、意欲をもって従事できる勤務体制の改善や人的・物的な条件整備が図られ



るよう、各都道府県・市区町村の状況に応じて、全国国公立幼稚園・こども園PTA連絡協議会等と連携し、関係諸機関に積極的に働き掛ける。

- 学校教育の一翼を担う教職員の職責に相応する適正な処遇を得て、資質の高い意欲的な保育者が確保されるよう、要望活動の強化に努める。
- 学校における働き方改革を受け、事務作業の軽減等の勤務環境整備のための支援が図られるよう要望活動を積極的に進める。
- 特別支援教育の充実に向け、人的・物的な条件整備が図られるよう、更に関係諸機関に働き掛ける。
- 東日本大震災等での教訓を基に、教育・保育の一層の充実を図り、施設の安全性を高めるため、引き続き関係諸機関に働き掛ける。また、被災地への積極的な支援活動を行う。

## 6 高知県国公立幼稚園・こども園会の充実

- 少子化に伴う園児数の減少とともに、幼児教育無償化の実施に伴う預かり保育の必要性の高まり等による「こども園」への移行が少しずつ増えてきている。このような社会の変化の中で、本会においても組織運営や研修会のあり方を改善し、一層の団結力をもって幼児教育の質の向上に努める。
- 幼児教育の重要性をアピールするために、『幼稚園・こども園ウィーク』を地域の実態に合った各園の特色ある取組の工夫により内容の充実を図っていく。
- 高知県少子化対策推進県民会議に参加し、子育て支援の一翼を担うようにする。
- 『第24回四国国公立幼稚園・こども園長研究会』が徳島県で開催される計画である。“四国はひとつ”という思いのもと積極的に参加し、講演会や研究協議を通して幼児教育を考え、学びの機会にする。

### 主要行事

- (1) 高知県国公立幼稚園・こども園会・評議員会（4月書面にて確認・2月園長等部会で確認）
- (2) 高知県国公立幼稚園・こども園会・理事会（4月書面にて確認・2月園長等部会で確認）
- (3) 高知県国公立幼稚園・こども園会総会 研究大会 . . . . . 中止
- (4) 高知県国公立幼稚園・こども園会歓送迎会懇親会 . . . . . 中止
- (5) 研究推進委員会 . . . . . 7/2・11/19・12月・2月・3/10
- (6) 主任等部会 . . . . . 中止
- (7) 園長研修会 . . . . . 7/2・2/19
- (8) 高知県国公立幼稚園・こども園会PTA研究大会 . . . . . 中止
- (9) 2020全国国公立幼稚園・こども園ウィーク . . . . . 11/13～11/19
- (10) 高知県国公立幼稚園・こども園教育研究会 . . . . . 中止

### 県外会議

- (1) 全国国公立幼稚園・こども園長会・理事会 . . . . . 中止
- (2) 全国国公立幼稚園・こども園長会・都道府県会長会 . . . . . 中止
- (3) 四国国公立幼稚園・こども園長会連絡協議会・理事会 . . . . . 11/6

### 全国大会

- (1) 第71回全国国公立幼稚園・こども園長会総会・研究大会埼玉大会 . . . . . 中止
- (2) 第67回全国国公立幼稚園・こども園教育研究協議会 和歌山大会 . . . . . 中止
- (3) 第58回全国国公立幼稚園・こども園PTA全国大会 富山大会 . . . . . 中止

令和2年度役員名簿

役 職 名	氏 名 (所 属)
会 長	西田 佳代 (いの町立伊野幼稚園)
副 会 長	古味 美和 (香南市立野市幼稚園)
副 会 長	山中 三重 (いの町立幼保連携型認定こども園ごほく)
副 会 長	須内 富 (越知町立越知幼稚園)
監 事	國澤 千陽 (芸西村立芸西幼稚園)
監 事	西村 玉子 (栲原町立幼保連携型認定こども園栲原こども園)
東 部 支 部 長 (理 事)	武田 了子 (香南市立夜須幼稚園)
高 知 支 部 長 (理 事)	中山 美香 (高知大学教育学部附属幼稚園)
中 部 支 部 長 (理 事)	上田 佳代 (高知市立かがみ幼稚園)
高 岡 支 部 長 (理 事)	西村 芳美 (津野町立幼保連携型認定こども園にじいろ園)
研 究 部 長 (理 事)	中山 美香 (高知大学教育学部附属幼稚園)
副部長・東部支部	甲藤 真理 (香南市立香我美幼稚園)
副部長・中部支部	橋本 鈴子 (いの町立伊野幼稚園)
副部長・高岡支部	中岡 公子 (栲原町立幼保連携型認定こども園栲原こども園)
主任等部会 部 長 (理 事)	明神 香奈 (津野町立幼保連携型認定こども園にじいろ園)
〃 副部長	川村 雅湖 (香南市立野市東幼稚園)
〃 副部長	橋本 鈴子 (いの町立伊野幼稚園)
事 務 局	竹村 美恵 (南国市立たちばな幼稚園)
顧 問	岡村 昭夫 ・ 山中千枝子 ・ 宮田 信司 鍋島 亨子 ・ 岡村 美佐

令和2年度支部構成

支 部 名	幼稚園・こども園数	幼 稚 園 ・ こ ど も 園 名
東部支部	8園	(認)なはり 田野 (認)安田さくら園 芸西 夜須 香我美 野市東 野市
高知支部	1園	附属
中部支部	5園	(認)えだがわ 伊野 (認)ごほく かがみ たちばな
高岡支部	5園	越知 (認)にじいろ園 (認)さくらんぼ園 (認)栲原こども園 (認)たのの

令和2年度研究推進委員・研究員名

支 部 名	推進委員	研 究 員
東部支部	伊吹 真弥	三谷 聡幸 ・ 東野 志保 ・ 片町 由麻 ・ 森安 智子 宮崎 成美 ・ 百田 裕貴 ・ 黒岩 和代
高知支部	鎌倉 正子	
中部支部	岡崎 和美	小泉 清人 ・ 宮地 里佳 ・ 吉永 貴子 ・ 廣内 璃緒
高岡支部	福井めぐみ	中岡 公子 ・ 西内 郁子 ・ 林 千佳 ・ 嶋崎 未都

## Ⅱ 令和2年度高知県国公立幼稚園・こども園会園長等部会事業報告

### 1 園長等部会

#### (1) 第1回 国公立幼稚園・こども園会園長等部会

日時 令和2年7月3日(金) 14:50~16:00

会場 高知大学教育学部附属幼稚園

議題 (1) 令和2年度事業計画及び予算案について

- ・事業計画について
- ・予算案について
- ・その他

(2) 世話役改選

(3) 今後の会の予定

(4) その他

#### (2) 第2回 国公立幼稚園・こども園会園長等部会 (Zoom会議)

日時 令和3年2月19日(金) 15:00~16:30

会場 Zoom以外の園は高知大学教育学部附属幼稚園

議題 (1) 会務報告

(2) 本年度の研究について

(3) 来年度の計画予定(理事会・評議委員会)

(4) 来年度の組織体制について

(5) 各園の動向

(6) その他

### 2 研究会・研修会への参加・他

- |                             |        |        |               |
|-----------------------------|--------|--------|---------------|
| ① 全国国公立幼稚園・こども園長会           | 第2回理事会 | Zoom参加 | 2/5           |
| ② 全国国公立幼稚園・こども園ウィークへの取り組み実施 |        |        | (11/13~11/19) |
| ③ 四国国公立幼稚園・こども園長会連絡協議会(徳島県) | 第2回理事会 |        | 11/6          |

### Ⅲ 令和2年度高知県国公立幼稚園・こども園会主任等部会事業報告

#### 1 事業報告

(1) 令和2年度主任等部会総会

日時 令和2年5月16日(土)

会場 高知県教育センター

\* 新型コロナウイルス感染拡大防止の為開催中止

(2) 第1回研修会(夏季研修)

\* 新型コロナウイルス感染拡大防止の為開催中止

(3) 第2回研修会(保育参観・研究協議)

日時 令和2年10月27日(火)

会場 いの町立幼保連携型認定こども園ごほく

内容 研修テーマ「保育を見る目を高め合おう」

\* 新型コロナウイルス感染拡大防止の為開催中止

(4) 第3回研修会(情報交換)

\* 新型コロナウイルス感染拡大防止の為開催中止

(5) 研究会への参加

① 高知県国公立幼稚園・こども園PTA研究大会

日時 令和2年10月15日(木)

会場 梶原町立幼保連携型認定こども園梶原こども園

\* 新型コロナウイルス感染拡大防止の為開催中止

② 令和2年度高知県国公立幼稚園・こども園教育研究会

日時 令和2年11月19日(木)

会場 芸西村立芸西幼稚園

\* 新型コロナウイルス感染拡大防止の為開催中止

(6) 第1回企画委員会

\* 新型コロナウイルス感染拡大防止の為開催中止

新役員の報告を各園メールで周知

(7) 第2回企画委員会

\* コロナ感染症拡大防止の為中止

## IV 令和2年度高知県国公立幼稚園・こども園会 研究部

### 1. 研究主題と研究方針

幼稚園教育要領等の改訂により、5領域を通して育まれる「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を具体的な幼児の姿を通して理解するとともに、そこにつながる保育・教育のあり方を小学校教員はもとより保護者や地域の関係者に説明し、幼児期の教育の重要性とそのあり方についての理解を促進することが求められている。こうした動きを受け、新幼稚園教育要領等への理解を深めるとともに、幼児教育の実践についての説明力向上につながるよう、本年度から研究主題を「5領域を通して育まれる幼児期の終わりまでに育ってほしい姿につながる保育のあり方（幼児理解をもとにして探る）」として、各支部で研究を進めることとした。

しかし、本年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止などの措置により、支部内での参集型会議も制約されるなど、研究を推進するには非常に難しい状況となった。中でも、本会の研究の灯は消さないよう取り組んでいきたいという願いから、各支部の現状に合わせて研究を進められるようにし、以下のような資料1・2を全園に配布して研究推進委員会を中心に取り組んできた。

(資料1)

(資料2)

**研究主題の捉え方**  
今年度、現行の幼稚園教育要領等に沿った保育実践も3年目を迎えました。



私たち、幼児教育では、園での遊びを通して幼児一人一人の「生きる力の基礎」を培うことを行っていますが、その「生きる力」を現行の幼稚園教育要領等で、より具体的に、三つの資質・能力の柱に沿って示されました。

例えば、①生きて働く「知識・技能」の習得へつながるその基礎は、「遊びや生活の中で、豊かな体験を通して、何を感じたり、何に気付いたり、何が分かったり、何ができるようにするのか」を問われています。

また、②未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成では、幼児教育において育みたいその基礎として、「遊びや生活の中で、気付いたこと、できるようになったことなども使いつながりながら、どう考えたり、試したり、工夫したり、表現したりするか」を見ていかなければなりません。

そして、③学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性」の涵養（砂に水がしみ込むように無理なく自然にその人のものになっていること）では、「心情、意欲、態度が育つ中で、いかによりよい生活を営むか」が、幼児教育で問われています。

私たちは、この遊びを通して育んでいる三つの資質・能力を次のステージへと確実に引き継いでいかなければなりません。

しかし、同じ教育であっても小学校教育とは少々教育方法が異なるため、その専門用語も異なり、しばしば十分に伝わらずにいました。そこで、新たに示されたのが「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」であり、保幼小接続をより一層進めていくことが可能となる小学校との共通言語でした。



この「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、これまで大切にしてきた健康・人間関係・環境・言葉・表現の5領域を通して育まれるものです。また、達成目標ではないものの、各園の具体的な子ども達の姿から、私たちの保育を振り返り保育実践を向上させていくことができるものでもあります。

今年度の私たちの研究は、この基本に立って各支部・各園で研究を進めていきたいと考えています。

**研究の進め方** (①～⑥は各園で、⑦は支部で)  
※これは例示ですので、各園の実態に応じて進めてください。

- 研究主題を確認する。  
前ページで述べた内容を各支部・各園で確認をして、研究をスタートさせましょう。
- 昨年度の研究成果・課題を確認する。  
新しいメンバーもいると思いますので、研究主題は異なるものの昨年度行ってきた各支部の研究成果と課題を「幼児教育のあゆみ」の冊子から確認しておきましょう。
- 保育の動画・写真を記録として撮る。  
・各園でいずれかのクラスの保育の動画・写真を記録として撮る。  
・担任が関わっているもので、場面の良さ悪しは問わない。  
例えば  
・研究主任など担当者が行う。  
・園内研究として皆で確認しながら行う。(付箋などを使うと追記や変更も簡単です。)
- 事例にする。  
・動画の20分程を切り取り、登場人物の動き・言葉・関わりを文字で起こす。
- 事例を基に協議する。  
・各園で事例や動画・写真を基に、各園児の経験の読み取り（何を楽しんでいるのかなど）をする。  
・その根拠を事例や動画・写真で確認し、記録<sup>※1</sup>する。  
・幼児期の終わりまでに育ってほしい姿にどのようなつながっていくかを考え、協議し、記録する。  
・次に求められる環境構成や援助を協議し、記録する。  
※1の例  
・①のどの部分を指しているのかが分かるように印をつける。
- 協議内容をまとめる。(A4用紙3～4枚)  
・④、⑤を他園・他支部の会員に伝わるよう、工夫してまとめる。  
・その際、根拠となる事実を正確に記すことを大切に。  
・数値化(分数・回数など)や図式化(対比・整理しやすい形)などを活用し、誰が見ても分かるものを心がける。  
・事実(事例や根拠)と、考察(考えや思い)を分けて記載する。  
令和元年度幼児教育のあゆみ  
各支部のまとめ 参照
- 支部で共通することはないか分析する。(A4用紙1枚)  
・各園から⑥を集め、支部として見えてきたことを整理し、まとめる。
- 支部の研究として提出する。  
・⑥、⑦を支部の研究として提出する。

全支部・園の協力を得て、ここに研究のあゆみをまとめることができたことに、心から感謝を申し上げたい。

## 2. 研究経過

実施日	会場	内容
4月下旬	高知大学教育学部 附属幼稚園	「令和元年度幼児教育のあゆみ」を各園に郵送
7月2日	芸西幼稚園	東部支部研 保育、指導案について
7月3日	高知大学教育学部 附属幼稚園	第1回園長等部会 研究計画・研究テーマについて 国公立幼稚園・こども園研究大会の進め方について
11月19日	芸西幼稚園	園内研修支援 保育、指導案について
12月下旬	各園	第1回研究推進委員会 各支部の研究資料の報告・協議（メール・郵送）
2月上旬	各園	第2回研究推進委員会 各支部の研究資料の報告・協議（メール・郵送）
3月10日	高知大学教育学部 附属幼稚園	第3回研究推進委員会 各支部の研究資料の検討 「幼児教育のあゆみ」のまとめ 令和3年度の研究テーマについて・2年度反省

## 3. 各支部・園の研究の取り組み

9ページからの各支部及び園の研究報告

## 4. 研究の概要

研究の概要については、「3. 各支部・園の研究の取り組み」の各支部の最初のページで述べられているとおりである。

これまでにない環境におかれた各支部・園が、研究主題に迫る研究方法やまとめ方に知恵を絞り、工夫していることが、本年度の大きな成果といえる。新しい研究方法やまとめ方に挑戦するには、園内での合意形成のための協議は欠かせず、イメージを共有するのにも一定期間かかったと思われる。また、新たな挑戦は常に迷いと不安とが隣り合わせの状況でもあったのではないだろうか。そうした中で、まとめられた各支部・園の資料を、ぜひ余すところなく読んでほしい。

令和3年度は、研究主題を引き続き「5領域を通して育まれる幼児期の終わりまでに育ってほしい姿につながる保育のあり方（幼児理解をもとにして探る）」として取り組んでいく。研究を通して、保育の基本である5領域を大切にしながら、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿への理解を深めるとともに、幼児理解の在り方へも迫っていきたい。そして、研究の取り組みにより、各園の教育・保育の質の向上につなげていきたい。

## 東部支部

### ○研究の方向性

昨年度は、根拠となる子どもの姿をもとに幼児が経験していることを振り返る必要性や、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿につながる環境構成や教師の援助について、遊びの展開に合わせて環境を再構成したり援助を変えたり、柔軟に幼児と関わっていく大切さを学んだ。

今年度東部支部は、幼稚園及びこども園8園のうち4園の取り組みを支部内で共有しながら研究を進めていくことにした。また、4園の事例や協議、まとめを通して、共通点や幼児の姿を正確に捉えるための工夫について見ていきながら研究を深めていきたいと考えた。

### ○研究で明らかになったことや共通点

- ・幼児の育ちから5領域で、教師の願いの特に経験として積み重ねていきたい内容の部分を確認し、今後の援助の方向性が明らかになった。また、教育課程や接続カリキュラムと照らし合わせて今後の発達を見通したりすることで、根拠をもって次の保育へとつなげていけることがわかった。
- ・教師のねらいと子どもの思いのズレの要因を考えるなど協議を深めたことで、言葉のかけ方、援助や環境構成、子どもの遊びがどんなことにつながっているのかなどを職員が意識した保育につながる。
- ・動画や写真を取り入れることで、幼児の表情や声のトーンなどの細かい心の動きなど事実を正確に把握することを意識するようになった。また、幼児の姿をより具体的で細やかに捉える為には、幼児が経験していることを5領域や10の姿で捉える際に、根拠や幼児が経験していることの意味を項目ごとに細分化しながら考えることが大切である。
- ・研究協議を通して担任だけの捉え方ではなく、他の職員の意見に触れ幼児を多面的に捉えることができ、幼児の育ちを捉え直したり今後の援助や環境構成、各年齢への発達の見通しを園全体で共通理解したりすることにつながった。

### ○まとめと今後の課題

今年度は、4園の事例を通して研究を進めてきたことで、それぞれの園での研究方法や成果を支部全体で共有できた。幼児の育ちを5領域で確認し、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿につながるこれからの育ちを見通したり保育のあり方を考えたりする中で、教師が幼児をどう捉え理解していくかによって5領域の捉え方や10の姿へつながっていく教師の援助、環境構成も大きく変わってくるということを痛感し、改めて幼児理解の大切さとその難しさを感じた。今回の4園の研究内容から、職員間で多面的に幼児の姿を捉える機会をもったり、5領域や教育課程、長期の指導計画などの活用したり、幼児が経験していることを5領域や10の姿で捉える際に根拠や幼児が経験していることの意味を考えたり、写真や動画を使って事例を作成したり協議をしたりすることなど幼児の姿をより正確に捉えるための工夫が学びとなった。また、事例の作成方法の工夫が次年度へとつながる学びであったと考える。

今後は、今年度の研究を通して学んだ幼児の姿から事実を正確に捉えるための工夫を支部の研究に取り入れ、幼児が経験していることからこれからの育ちを見通して、必要な経験や教材研究の仕方、教師の援助なども考えていきたい。また、引き続き、幼児理解を基にした5領域を通して育まれる幼児期の終わりまでに育ってほしい姿につながる保育のあり方についても探していきたい。

## 東部支部 田野町立田野幼稚園

研究主題 「5領域を通して育まれる幼児期の終わりまでに育ってほしい姿につながる保育のあり方（幼児理解をもとにして探る）」

### 1. 研究にあたって

昨年度の東部支部の研究を通して、子どもの思いと教師の意図を絡めながら援助していくためには、日々の保育で子どもがどのような経験をしていたかや子どもの楽しんでいる姿の根拠となる部分を正確に読み取り振り返っていくことの必要性を学んだ。

本園の5歳児は、支援児担当含む3人の教師を介して友達との関わりや遊びが展開されていくことが多く、子ども同士の言葉でのやりとりが少ないことや教師が遊びから抜け、子ども同士になると遊びが長続きしないという実態があった。

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿として幼稚園教育要領には、5領域のねらい及び内容に基づく活動全体を通して資質・能力が育まれている幼児の幼稚園修了時の具体的な姿であり、教師が指導を行う際に考慮するものとして示されている。保育のあり方として(3)協同性や(9)言葉による伝え合いなど、年長児の遊びの一場面から、具体的な子どもの姿を捉え、どのような教師の関わりや環境構成が必要かを考えていくことで、研究主題に迫っていきたい。

### 2. 研究の進め方

- 保幼小連携・接続推進支援事業公開保育を通して、保育の視点にもとづいて研究協議を行う。
- 教師の関わっている場面をビデオカメラで記録する。
- 研究協議で話し合った場面について動画をもとに事例として書き起こす。
- 事例から子どもが経験していたことを書き出し、『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』（以下10の姿という）のどこへつながっているかを書き出し確認する。また、5領域のどこに当てはまるかを考える。
- 協議や講師助言を受け、明日の保育につなげるための教師の関わりや環境構成について検討、共有する。

### 3. 研究事例

10月23日（金） 5歳児きりん組 男児11名 女児5名 計16名 しっぽ取りの場面より

本日のねらい◎と内容○

\*一部抜粋

- ◎友達と一緒に体を動かしながら、鬼ごっこやドッジボール、サッカーのルールを確認したり、一緒に考えたりしながら遊ぼうとする。
- 友達や教師と一緒にルールを確認したり、一緒に考えたりしながら遊ぶ。
- 自分の力を思い切り出したり、チームで力を合わせたりして遊ぶ。
- 自分の思いを伝えたり相手の思いを聞いたりして一緒に遊びを進める。

<協議の視点>～10の姿と5領域に分類して～

- ①自分たちで遊びや生活のルールや役割を決めて楽しんでいる姿
- ②気の合う友達や先生と関わりながら遊ぶ姿
- ③友達と共通の目的をもち、協力をしながら遊びを進めている姿



【幼児期の終わりまでに育ってほしい姿】

- (1)健康な心と体 (2)自立心 (3)協同性 (4)道徳性・規範意識の芽生え (5)社会生活との関わり (6)思考力の芽生え  
 (7)自然との関わり・生命尊重 (8)数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚 (9)言葉による伝え合い  
 (10)豊かな感性と表現

事例 ・子どもの姿が見られた場面	⇒ ○経験していたこと *考察(10の姿の番号)《具体的な姿》より抜粋	5領域
---------------------	---	-----

①自分たちで遊びや生活のルールや役割を決めて楽しんでいる姿

・後から仲間入りした友達にルール(帽子の色)を知らせた。 ・帽子の色が違っている友達がいないか全体を見回し、声を掛けた。	⇒ ○どうしたら鬼役と逃げる役が分かりやすくなるか考えて <u>アイデアを出していた。</u> *視覚的に分かりやすくすることで、逃げる場所を考えたり敵のチームとの区別をつけたりしたかったのではないか。 (3)《考えたり工夫したり》 (6)《友達の考えに触れ考えをよりよいものに》	人間関係 言葉
---	---	------------

②気の合う友達や先生と関わりながら遊ぶ姿

・しっぽの数を数えているような姿が見られ「4本取れたで」と教師に見せた。 ・教師が「すごいね!どうやったらそんなに取れるが?みんな速いのー」と言う「赤土山のところに追いかける作戦にしたら取れた」と答え、教師は「すごい!考えてやったがやね」と認めた。	⇒ ○取りたい、捕まえたいという思いから <u>工夫や諦めずに追いかける姿</u> が見られ、しっぽを手に入れることができた <u>嬉しさや喜びを教師に伝えたい思いがあった。</u> *思いを聞いてもらい、褒められたことに自信をもつことができたのではないか。 (1)《自分のやりたいことに向かって》 (2)《考えたり工夫したり、諦めずにやり遂げる》 (9)《言葉で伝える》	健康 言葉 表現
・E子がB男のしっぽが服で見えないことで困っていることを教師と一緒に遊んでいた子ども達に伝えたとA男が「服をズボンの中に入れてもいいんじゃない?」と自分の服をズボンに押し込んで見せながら提案した。 ・B男も、A男の姿を見て同じようにズボンに突っ込んで入れて、E子の方にしっぽが見えるように体を向けた。	⇒ ○A男は、E子が困っていることに気付き、B男の「服が長いさ」という <u>両方の言葉を聞いて提案しようとした。</u> ○B男はE子の表情やA男の提案を聞き入れて、 <u>気持ちの調整をしたり相手の気持ちに気付いたりしている。</u> ○モデルを見せてくれたA男は、E子の困っていることを <u>自分なりに解決しようと考えた。</u> *A男は、モデルを見せてくれた方が相手に伝わり、分かりやすいと気付いたのではないか。 (3)《考えたり、工夫したり、協力したり》 (4)《相手の立場に立って考える》 (6)《気付いたり、考えたり、予想したり》 (9)《言葉で伝える》	言葉 人間関係 言葉 言葉

③友達と共通の目的をもち、協力をしながら遊びを進めている姿

・D男が「みんなでいっしょに行こう」と提案した。近くに居たA男やB男にもう一度大きな声で「みんなでいっしょに行こう」と声を掛け、みんなで一斉に走って追いかけたり砂場の両側から挟み討ちをしたりして、F男とC男を追いかけた。	⇒ ○チームで頑張ることや友達と <u>協力することの楽しさ</u> を味わっている。自分なりに考えた作戦を <u>友達に伝えて共有</u> している。 *D男は、「チームで!」という意識があり「みんなでいっしょに行こう」という思いが言葉になったのではないか。 *絶対に捕まえたいという目的のA男とB男は、「みんなで」という思いの強さから大きな声で伝える姿になったのではないか。 (3)《協力して充実感をもって》 (9)《考えたことを言葉で伝える》	環境 人間関係 言葉
--	---	------------------

【明日の保育に繋げるための環境構成や教師の関わりについて大事にしたいこと】

研究協議・講師助言より学んだこと

教師の関わりについて
<p>○しっぽを短くして、捕まらないように工夫することや、しっぽを気にしながら走ることなど、子どもが自分で考え試そうとする姿を受け止め、認めることで(1)健康な心と体の“充実感をもちながら自分のやりたいことに向かっていく”姿になるのではないかな。</p> <p>○友達に自分の思いを伝える場面では、なかなか伝わらず困ってしまうこともあったが、困ったことを教師だけではなく、友達と一緒に解決しようと話し合えるようにすることが、(3)協同性の“相手の思いに気付いたり、共通の目的に向かって考えたり工夫したりする”姿になっていくと考えられる。</p> <p>○子ども達の遊びの楽しみ方によって、お助けしっぽでしっぽの数を増やす、同じ条件が良いかなどルールの共有をする、子ども達と一緒に色々な意見が出せる方法を考えるなど、子ども達が取捨選択をしてルールを考える場や試す機会をもつことで、(6)思考力の芽生えの“自分の考えをよりよいものにしたたり、新しい考えを生み出すこと”につながっていくのではないかな。</p> <p>○一見するとルールの逸脱に見えることも、しっぽを取られないようにしている工夫や知恵だと捉えるとその子どものよさになる。教師が善し悪しを判断せず、自分で考えられたことを受け止め認めることが、自己肯定感を育むことにつながっていくのではないかな。</p>
環境構成について
<p>○しっぽは長い物や短い物を自分で選べるようにしておいた。捕まらないようにするための工夫として、どのしっぽが良いかを遊ぶうちに子ども自身が試していけるようにし「長いのがいい!」「キラキラしたのがいい!」などの子どもの思いや提案が生まれると、(3)協同性と(6)思考力の芽生えの“考えたり試したりする”姿につながっていくのではないかな。</p>

#### 4. まとめ

教師がそれぞれの遊びを進めていく子どもの姿を見守ったり、話し合ったりする機会をもつことで、子ども同士で話し合う姿につながってきた。それぞれの考えを出し合う時に教師が見守り励ますことが必要な場面はまだ多いが、自分なりに相手に伝わるように話そうとしたり、自分達で友達の仲をとりもとうとしたりする姿も増えてきた。教師を介して気持ちを受け止めてもらい友達が提案したルールを確認したり、それぞれの気持ちに折り合いをつけたりするなど、10の姿の協同性や言葉での伝え合いにつながる姿があった。しかし、教師が介入しすぎることで子ども同士での思いのやりとりが十分できずに教師の言葉を頼りにして考え、思いを伝えようとする姿が育ちにくくなっていた。子ども達で思いを出し合って遊びをつくっていく過程を大切に、必要に応じて提案したり、一人一人の思いを受け止めたりすることが大事であると考えた。また、5領域を通して、子ども達が共通の目的をもって考えながら遊びを展開していけるように色々な発想を引き出す素材やルールのある遊びを提供していくことで、素材にこだわったり遊びのルールを変えていったり自分達でよりよい考えを生み出すことにつながっていく。翌日の環境構成を行う際には、子どもの遊びの様子を予想し環境を再構成すると共に教材研究を行い、遊びが発展するような教材を準備していきたい。

今回動画で教師の関わっている場面を記録し、子どもや教師の表情や言葉を拾いながら子どもの内面や経験していることを推測すると共に、自分なりにこだわりをもち思いを貫こうとするそれぞれの良さや、困っていることを友達に伝えられない姿から育ちを捉え直すことができた。また、子どもの表情や声のトーンなど瞬時の細かい心の動きや多面的に子どもの良さを捉えることができた。今後も、公開保育を活用して記録係などの分担を行うなど継続していきたい。

## 東部支部 芸西村立芸西幼稚園

研究主題 「5領域を通して育まれる幼児期の終わりまでに育ってほしい姿につながる保育のあり方（幼児理解をもとにして探る）」

### 1. 研究にあたって

昨年度は、子どもの具体的な姿からどのような興味や思いがあったのか、またその子どもの育ちはどうなのか等を探る中で、教師一人一人が子どもの見方の偏りや保育のよさや課題に気付き、保育を見直すことができた。また、『幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿』に照らし合わせることで、具体的な援助や保育の見通しにつながったと思われる。

今年度は、全職員で子どもの経験していることや育ちを共有し、しっかりと評価・次の計画につなげていくことができるよう、日々のお話し合いや、記録を取る時間を確保している。また、研究保育や事後研究等を計画的に行い、子どもの育ちを5領域に着目しながら検討し、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿につながる保育のあり方について探っていきたいと考えている。

### 2. 研究の進め方

- 事前研究を全教師で行い指導案をもとに協議し、そこで出された子どもの姿から研究保育の視点を確認する。
- 5歳児の研究保育を行い、幼児理解や援助のあり方、環境構成について研究協議を行う。協議の中で出された子ども達の姿から、5領域の内容を確認する。
- 事後研究を行い、研究保育で行った協議内容と講師の助言をもとに幼児理解を深め、幼稚園教育要領や教育課程、接続期カリキュラム等を用いながら子どもの育ちを捉え、次への援助を探る。

### 3. 研究事例

<研究保育>

7月2日(木) 5歳児そら組 男児11名 女児13名 計24名

気になる子ども達の姿

- ・興味をもち楽しんでいたと思われる遊びが「明日も続きをする」と言うものの継続されにくい。
- ・困ったことや要求を「○○(…がない)(…してほしい)」と単語のみで伝えることが多い。

本日のねらい(◎) 内容(○) (抜粋)

- ◎自分の思いや考えを相手に伝えたり、相手の話を聞いたりしながら、自分たちの遊びを楽しむ。
- ◎自分なりのイメージをもち、身近な素材や道具を使って試したり工夫したりしながら作る楽しさを味わう。
- 自分なりに考えたり、友達や教師に提案したりしながら遊びを進めようとする。
- 段ボール、芯等いろいろな素材を使って、自分なりに工夫したり友達のやり方に刺激を受けたりして取り入れようとする。

協議の視点

- ・どんなことに興味や関心をもって関わり、どのように遊んでいたか(事実を捉える)
- ・どんなことに楽しさを見出しているか。(根拠をあげ、推し量る)
- ・本日の保育のねらいに基づき、明日の保育をどのように充実させていくとよいか。(環境の構成と援助の側面から)

協議内容

【子どもの姿①】

・2人の幼児が、友達の作ったねこを見て「むずい」と言いながらも「どうやって」「丸めるが？」等繰り返し聞いたり、友達や教師に手助けしてもらったりしながら作り上げた。



【子どもが楽しんでいること】

・友達の作ったねこにあこがれ、同じように作ること。  
・作りだすと難しいけれど、聞きながらやってみること。

【5領域 ( ) 内容】

人間関係 (2・6・7)  
言葉 (1・2・3・4)  
表現 (5・7)

・「みゃーみゃーみゃー。僕、寂しいにゃー」と友達に寄って行ったり「ドライバー」と豆腐のカップに作ったねこを入れて動かしたりして友達のねこに声をかけた。



・友達と関わること。  
・ねこになりきってしゃべったり作ったねこを動かすこと。

人間関係 (2・5・6・7)  
環境 (2)  
言葉 (2・7)  
表現 (4・5・8)



・2人で「家はここで」「ここはきついにゃん」等と空き箱を利用して“ねこの家”を作っていた。



・友達とやりとりしながら、一緒に家を完成させること。

人間関係 (2・4・5・6・7・8)  
環境 (2・7・8)  
言葉 (2・3・4)  
表現 (4・5・7・8)

【子どもの姿②】

・「〇〇しなくちゃ」「◇◇ね」と言いながら、髪をといたりとかれたり、鏡を見ながら結んでもらう等美容院ごっこをしていた。その後、同じメンバーのまま、場所(ホール)を移し、遊びを変化させながら最後には美容院(家)へ帰ってくる。



・美容師、お客さんになりきって動いたり、言葉でのやり取りをしたりすること。  
・仲間の一員となって一緒に行動すること。

人間関係 (1・5・6・7・8)  
言葉 (1・2・4・8)  
表現 (4・8)

◎明日からの保育を充実させるためには…

《環境構成》

○2～3人で遊んでいる子どもがほとんどであった。2～3人の集団はぶつかり合いが少なく、自分達の保育室以外にも使える部屋があるということは、子どもが場を確保しやすく子ども同士で相談し調整する必要がない。相談し合って決める経験も必要と思われるので、場の使い方を考えてみてはどうか。

《教師の援助》

○子どもの気付きに対して「どうしたらいいだろう」と促したり「どんなところが難しかった？」等聞いたりして、活動の振り返りから言葉を引き出していく援助をプラスしてはどうか。

○主張の強い子どもへ目が向いたり、関わったりする傾向があるので、静かな子ども、自己主張の強い子どもの周りにいる子どもに対しても、自分で行動することの充実感を味わうことができる援助が必要ではないか。まずは、教師が認める機会を作ったり、一緒にじっくり考えてみる時間を保障したりしてはどうか。

<事後研究>

◆「あまり関わってこない子どもや、主張の強い子どもの周辺にいる子ども達にもスポットが当たるようにすると良い」という意見をもとに、協議には出なかった子ども達について話し合った。

【ここでは、その中の1人であるA児について記載する】

《A児について》

- 友達と行動を共にする楽しさを感じている。
- 自分の感情や思いを表情や言葉で表すことが難しい。

【A児に対する教師の関わりとして意識していきたいこと】

～自信がつくように～

本児の言動、頑張りを認めたり、周りの友達にも気付かせたりする機会をつくっていく。

身近な人と親しみ、関わりを深められるような経験を増やし、自己発揮できるようにしていく。

～自分自身や友達の感情が分かるように～

自分や友達の感情を知る経験や、共感してくれる相手の存在に気付ける経験を積み重ねていく。

クラス内で話し合う機会には、本児の思いを引き出したり、友達の意見を分かりやすく整理したりする。



プール遊びが始まって3週目の週案に、週の途中であったが個別の配慮点を赤で記載するようにし、教員間での意識化を図った。(A児を含めた、数名の子どもに対して)

【プール遊びを通しての教師の関わりとA児の様子や変化】

A児は、顔へ水が散るのも苦手だったが、この週は、友達に手で支えてもらいながら、顔付けから蹴伸びをするようになった。

教師は「頑張れるところまでいいよ」という声掛けをしながらも、小さな変化も見逃さず認め言葉を掛ける関わりを意識した。また、本児の頑張る姿を取り組む姿をクラスの友達も応援する形で見られる機会を作った。

教師が認める言葉を掛けたり、友達がA児の頑張りに拍手したりすると、本児も照れ笑いしながら、教師とハイタッチする姿を見せた。

水に対して抵抗があったA児の成長や気持ちの変化を感じた教師は、A児の思いを詳しく知りたいと思った。

そこで2人きりで話す時間を持ち、問いかけると、A児は「他児の頑張りを見て“自分も頑張らないかん”と思った」ことや、「自分の頑張りを周りの友達が「すごい」と褒めてくれたことが嬉しかった」と言った。言うまでには時間がかかり、ゆっくりであったが、その時の自分の思いを振り返り自分なりの言葉で伝えようとする姿が見られた。

◎協議には出なかった子ども達について全職員で話し合う中で、これまで以上に子どもへの理解が深まり、援助の方向性をはっきりさせることができた。そのことによって、A児やアプローチの少ない子どもの姿に目が向き始め、心情を細やかに捉えようとしたり、適切な関わりを心掛けたりする援助へとつながったと思われる。短期間であったが、自身の言葉で思いを伝える等のA児の変化を実際に目の当たりにしたことで、職員間で幼児理解を深めることの重要性や、個々を丁寧に捉えるための具体策を講じることの必要性を痛感した。

◆研究協議に出てきた『子どもの姿②』の子ども達の実態から、今後育てていきたい方向性や教師の援助を、幼稚園教育要領を用いながら探った。

【子ども数名が楽しんでいたこと】

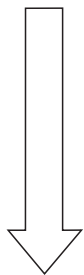
- なりきって動いたり、言葉でのやりとりをしたりすること
- 仲間の一員となって一緒に行動すること



【5領域の中の『人間関係』の内容を確認する】

※『言葉』『表現』の部分は省略する。

- 人間関係①（共に過ごす喜びを味わう）
- "   ⑤（様々な感情を共有する）
- "   ⑥（思いを伝えたり、気付いたりする）
- "   ⑦（友達のよさに気付く）
- "   ⑧（工夫したり、協力したりする）



《担任の願い》

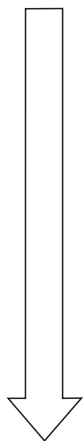
友達と共通のイメージをもち、思いやアイデアを伝え合える仲間になりつつあるが、遊びが次々と移り、遊びの深まりや夢中度があまり感じられない。



子ども一人一人が自分なりに“こんなにしたい”という目当てや思いをもって、考えたり、友達に伝えたりできるようになってほしい。

【『人間関係』で、特に経験として積み重ねていきたい内容の部分を確認する】

- 人間関係②（自分なりに考えて、自分の力でやってみようとする）
- "   ④（色々な遊びを楽しみながら、やり遂げようとする気持ちをもつ）



《今後の援助として》

話し合いの時間を取る

- 降園活動の時等、遊びの紹介の時間をとり、子ども達が振り返ってプロセスを話す機会になるような意図的な関わりを心掛けていく。
- また、遊びや生活の中で起きたことをグループやクラス皆で話し合い、共有することで、遊びや生活が豊かになっていくのではないだろうか。

教師の不要な関わり、声掛けを減らす

- 子どもからの単語での要求に、教師が思いを汲んで手助けすることもあったが、要求を文章にして言えるよう促したり、子どもなりに試行錯誤したりできるような関わりを行う。

【自園の教育課程と接続カリキュラムを見て、これからの発達の見通しを確認する】

- 友達関係を深めながら、自分の力を十分発揮する時期（3期9月～12月）**
- 友達と共通の目的をもち、助け合ったり知恵を出したりしながら、遊びを進めるようになる。
  - 友達関係に広がりが見られるようになり、いつも遊んでいる友達だけでなく、たくさんの友達とも遊ぶようになる。

◎子ども達の楽しんでいることから5領域の内容と照らし合わせることで、子ども達の育ちが見えてきた。育っている部分を丁寧に捉えることができたとともに、課題となる部分もはっきりしてきた。今後の援助の方向性や具体的な方策を5領域を基に考えたり、今後の発達の見通しをおさえたりすることで、根拠をもって次の保育へとつなげていけることが分かった。

#### 4. まとめ

今回の研究保育や事後研究を通して、どの教師も子どもが経験していることや育ちについて、普段の話し合いより幼児理解が深まったことを実感できたのは、保育中には気付かなかった子どもの姿、背景、保育者の関わり等を、5領域のねらいや内容と照らし合わせながら検討したことが大きな要因ではないだろうか。

また、子ども達の育ちを正確に捉えたり今後を見通したりするために、5領域や教育課程、長期の指導計画等を活用したことにより、今の子ども達に必要な経験は何か、指導や保育の重点をどこに置くのかについて共通理解を図り、次の保育へと活かすことができた。

来年度も、幼児の経験していることや育ちについて話し合う時には5領域や教育課程を土台にして、それぞれの遊びや活動のどこに幼児期の終わりまでに育ってほしい姿があるのかを見極めていけるようにしたいと考えている。

今年度は保育カンファレンスの機会が増えたことで保育者1人では見えていない姿や他の保育者の見解が聞ける等、職員間で多面的な視点で子どもの内面を探り、関わり方を模索しようとする姿勢へと変化したことが、大きな成果である。また、保育カンファレンスを積み重ね、1人の子どもを多面的な目で捉えることは幼児理解を深めていく力をつけていくために必要であることを実感した。

来年度も、子ども達が楽しんでいることは何か、どのような力を身に付けているのかについて見極めるために、日々の記録をとることや話し合いを大切に継続していきたい。そして、遊びを充実させ、発達を促す体験につなげていく為に、保育環境の充実や教材研究にも視点を向け、取り組んでいきたい。

## 東部支部 香南市立香我美幼稚園

研究主題 「5領域を通して育まれる幼児期の終わりまでに育ってほしい姿につながる保育のあり方（幼児理解をもとにして探る）」

サブテーマ 主体的に生活や遊びを楽しむことができるような環境構成や保育者の援助について ～友達との関わりを通して～

### 1. 研究にあたって

教師が子どもの姿や発達をどのように捉えたかによって、ねらいの設定や環境構成、関わり方が違ってくるところから、幼児理解は保育の基本であると考えられる。しかし、職員の経験が浅いために子どもの捉え方が偏ったり、反対に経験があることで先入観を持った捉え方をしてしまったりすることもあった。本年度は園内研修の中で、子どもが主体的に遊んだり生活したりしている姿を5領域や幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（以下「10の姿」という）にあてはめ、職員間で事実に基づいた協議を行うことで子どもを多角的に捉え、子どもの実態に沿った発達の捉えや幼児理解を広げることができるよう取り組んでいる。本研究では5領域や10の姿の視点から、子どもの姿の捉え方や考え方について協議を行い、子どもの見方を深めていきたい。

### 2. 研究の進め方

令和2年10月15日（木）のブロック別研修会で行った協議をもとに事例をおこし、5領域の中でも捉えることが難しい「健康」を取り上げ、下記のことについて協議を行い、協議で得た学びをまとめる。

- ①領域「健康」につながる子どもの姿から子どもが経験していることを捉え、10の姿にあてはめる。
- ②子どもの姿が領域「健康」のどの部分につながるか。またそのように捉えた理由はなぜか。
- ③子どもの経験や②で話し合ったことが、子どもにとってどのような意味があるのか。

### 3. 研究事例

令和2年10月15日（木） 年長児 ひまわり組 男児17名 女児11名 計28名

ねらい（抜粋）○自分なりの目当てをもって試したり、友達と繰り返したりすることを楽しむ。

- 内容
- ・跳び箱の高さを友達と相談しながら、繰り返し遊ぶ。
  - ・自分で作った紙飛行機を、友達と一緒に飛ばして遊ぶ。
  - ・友達とリレーをしながら力いっぱい走って競うことを楽しむ。

事例 紙飛行機飛ばし ～これまでの様子～

紙飛行機飛ばしは何日も続いており、教師と一緒に学級のしたい子どもたちが遊戯室で決まった時間に遊んでいた。遊戯室には、紙飛行機を折るための座卓の上に、広告紙・色画用紙・ポスター・折り紙・油性ペン・セロハンテープ・紙飛行機の折り図が用意されていた。また、壁から壁にスズランテープを這わせ、そこに広告紙で作った丸や三角の的をぶら下げていた。

この日も飛行機飛ばしの時間がくることを楽しみにし、教師や友達と開始時刻の確認をする姿が見られた。やっと時刻になると一斉に5人の子ども達が遊戯室に集まった。

1 Aは床から三角の的を狙って、片目を細めたり、手を前に伸ばしたり大きく振りかぶったりして紙飛



行機を飛ばした。それでも入らないと巧技台を移動させ、繰り返し挑戦した。やっと三角的に入ると「やったー！」とガッツポーズをした。

同じ場にいたBは紙飛行機を自分で折った後、巧技台に上がり、2紙飛行機を顔の横から後方いっばいに手を引き、勢いをつけて飛ばすことを繰り返していた。紙飛行機がよく飛び、壁まで届くと「こんなに遠くまでいったー」と嬉しそうに教師に伝えた。

<p>1. 領域「健康」につながる子どもの姿</p> <p>経験していること（10の姿） そのように捉えた理由</p>	<p>2. (領域健康の内容) 領域「健康」のどの部分につながるか。</p>	<p>3. 子どもの経験や左記の2で話し合ったことが、子どもにとってどんな意味があるか。（10の姿）</p>
<p><u>1</u> Aは床から三角的を狙って、片目を細めたり、手を前に伸ばしたり大きく振りかぶったりして</p> <p><u>2</u> 紙飛行機を顔の横から後方いっばいに手を引き、勢いをつけて飛ばすことを繰り返していた。</p> <p>◎風に乗って飛ぶ飛行機を見て投げ方や力加減を調節し、もう少しで入りそうな手ごたえを感じている。(①⑥⑦⑩)</p> <p>◎腕を思い切り振って飛ばすなど、のびのびと体を動かすこと。(①)</p>	<p>(2)体の動かし方が分かってきている。この活動に興味や関心をもち、様々な動きを考え十分に体を動かすことを楽しんでいる。</p> <p>(4)紙飛行機を遠くまで飛ばしたいという気持ちをもち自分なりに試したり工夫したりしている。</p> <p>(10)的を狙って遊ぶ中で、友達や周りの人に向けて飛ばすと危険だということがわかっている。</p>	<p>○遊んで楽しかったという満足感が得られ、興味や関心が広がったり心身の調和のとれた発達につながったりしている。(①②⑥⑩)</p> <p>○遊びが自然と身体機能の発達につながっている。(①⑥)</p> <p>○飛行機が飛ぶ様子から力や方向、風との関わりなどを体感している。(①⑥⑦⑧)</p> <p>○自分が考えたことや体の機能を生かして遊んだり楽しさを味わったりしたことで、今後興味や関心をもったことに自ら関わろうとする気持ちをもつことにつながる。(①②⑥⑧)</p> <p>○試行錯誤をしながら十分に体を動かすことで自分の体に関心をもつことにつながる。(①②⑥⑧⑩)</p> <p>○幼児がやってみたいという環境を用意することで幼児が意欲的に活動に取り組むことにつながっている。(①②⑤⑥)</p>
<p>・「こんなに遠くまでいったー」と嬉しそうに教師に伝えた。</p> <p>◎先生との関わりの中で安心感を持つ。(①②③④⑨)</p> <p>◎紙飛行機が遠くへ飛んだことの喜びを味わう。(⑥⑧⑨⑩)</p>	<p>(1)先生との信頼関係のもと、友達や先生と同じ場で遊んでいる。その中で受け止めてもらえる安心感や共感してもらえる喜びを感じている。</p> <p>(4)楽しい活動だと感じているから「こんなに遠くまでいったー」と喜んでいる。</p>	<p>○先生や友達と安心して過ごす中でやりたいことができた充実感や先生や友達に認められたことでさらなる意欲へつながっている。(①②⑥⑨⑩)</p> <p>○教師に気持ちを受け止めてもらえる安心感が、周囲の環境に自ら関わっていこうとする意欲や自立心へとつながる。(①②⑤⑧)</p> <p>○自分の気持ちを安心して表現している。(①②③⑨)</p> <p>○「こんなに遠くまでいったー」という言葉から距離の長短に興味や関心をもっている。(⑧)</p> <p>○自分の喜びを伝えたい、知ってもらいたいという気持ちをもつことが、自分の良さを自分で認める力や自己表現する力につながっていく。(①②⑥⑩)</p>

～事例の幼児の姿から経験していることを領域：健康の内容で捉える～

健康の内容：(1)先生や友達と触れ合い、安定感をもって行動する。

(2)いろいろな遊びの中で十分に体を動かす。

(3)進んで戸外で遊ぶ。

(4)様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む。

(5)先生や友達と食べることを楽しみ、食べ物への興味や関心をもつ。

(6)健康な生活のリズムを身に付ける。

(7)身の回りを清潔にし、衣服の着脱、食事、排泄などの生活に必要な活動を自分でする。

(8)幼稚園における生活の仕方を知り、自分たちで生活の場を整えながら見通しをもって行動する。

(9)自分の健康に関心を持ち、病気の予防などに必要な活動を進んで行う。

(10)危険な場所、危険な遊び方、災害時などの行動の仕方が分かり、安全に気を付けて行動する。

10 の 姿：①健康な心と体 ②自立心 ③協同性 ④道徳性・規範意識の芽生え ⑤社会生活との関わり

⑥思考力の芽生え ⑦自然との関わり・生命尊重 ⑧数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

⑨言葉による伝え合い ⑩豊かな感性と表現

#### 4. まとめ

よく使われる「子どもを捉える」「子どもが経験していること」とは、子どもの遊びのどの場面を切り取り、どう読み取ればいいのか、経験の差はありながらもどの職員も難しさを感じている。

今回、幼児が経験していることを5領域や10の姿を通して考えたことで、子どものどのような姿が領域健康につながるのか具体的に話し合うことができた。また、その姿と10の姿のつながりや、子どもにとっての意味という様々な切り口を設定したことで、子どもの姿が細分化され、具体的で細やかに捉えることにつながったのだと思う。他の職員の具体的な意見を聞くことで自分とは違う子どもの見方を知ることや、自分の考え方を整理することもでき、幼児理解を深めることにつながった。これらは、幼児の中で育てている力（育とうとしている力）であると捉え、今回の学んだことや5領域に基づき幼児の育とうとする力の下支えとなるような保育を目指していきたい。

## 東部支部 香南市立野市幼稚園

研究主題 「5領域を通して育まれる幼児期の終わりまでに育ってほしい姿につながる  
保育のあり方（幼児理解をもとにして探る）」

サブテーマ 子ども一人一人が遊び込めるようになるための保育を考えて  
～幼児理解をするための教師の関わりについて～

### 1. 研究にあたって

昨年度の研究を通して、子どもたちが“遊び込めるようになるために”は、幼児一人一人の姿（表情・つぶやき・目線・行動など）の読み取りをし、幼児理解をすることの難しさや教師の弱さがあることに気があった。そこで、今年度は、幼児の姿から事実を捉え、内面理解する力を高められるようにしていく。そして、幼児の姿を5領域にあてはめて振り返ることを積み重ね、教師の関わりをどのようにすればよいのかを探っていきたい。

### 2. 研究の進め方

- 4歳児の研究保育を通して、協議の視点に迫っていく。
- 協議の中では、子どもが経験していることを5領域で捉え、保育を振り返る。

### 3. 研究事例

令和2年9月18日（金） 4歳児 ゆり組 男児13名 女児8名 計21名

○本日のねらい ■内容

- 教師や友達と一緒に繰り返し体を動かして遊ぶことを楽しむ。
- 教師や友達と一緒に走ることを楽しみながら繰り返しかけっこをする。
- 教師や友達と一緒にひょうたん鬼や竹ポックリに挑戦する。
- 自分の思いを伝えたり、友達の言葉を聞いたりしながら遊ぶことを楽しむ。
- 同じ場にいる友達や教師に、自分の思いを伝えながら空き箱や広告紙で作ったロボットや剣など自分なりにイメージした物を作る。
- 教師と一緒に自分の思いを伝えたり友達の言葉を聞いたりしながら、ジオシェイプスやままごとをする。
- 作ったものを遊びに取り入れ、友達と一緒にごっこ遊びをしたり、ダンスを踊ったりする。

<協議の視点>

- ①子どもたちは何を楽しんでいたか。
- ②その姿につながった教師の関わりと環境構成。
- ③明日の保育につなげていくために。

【協議内容】

視点①子どもたちは何を楽しんでいたか。

子どもの姿	楽しんでいたこと・経験していること（育ち）	5領域
<ul style="list-style-type: none"> <li>友達と話をしながら同じ物を作り、出来上がると嬉しそうに「いえーい」と言って棒をくると回して遊んでいた。片付ける時には、一人一人が大事そうにロッカーに入れていた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 友達と一緒にすること。</li> <li>* 自分なりに作ろうとしていること。</li> <li>* 自分の思いを表現すること。</li> <li>* 作った物を大切に扱おうとすること。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●人間関係</li> <li>●環境</li> <li>●言葉</li> <li>●表現</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>かけっこはしていなかったが、走っている友達を見て「がんばれ」と応援していた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 遊んでいる場の雰囲気を楽しんでいること。</li> <li>* 友達の存在を感じていること。</li> <li>* 言葉にすることで参加している感覚を楽しんでいること。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●人間関係</li> <li>●言葉</li> <li>●表現</li> </ul>



子どもが楽しんでいたこと・経験していたことを出し合い、5領域につなげていくようにした。育ちとして偏りがあるのではないかと考えていたが、線を引き確認し合うことで、4歳児として、この時期に経験していることがバランスよくあるのではないかと育ちの確認ができた。

視点②その姿につながった教師の関わりと環境構成。

教師の関わりと環境構成をそれぞれ出し、その事実から良さや実態を具体的に話した。

○教師の関わり（事実）—抜粋—

- 子どもと同じ物を作っていた。
- 見守ったり共感したりしていた。
- さりげない声掛けをしていた。
- やりたくなるような声掛けをしていた。
- つぶやきを聞き同じことをして一緒に遊んでいた。 等

○教師の良さ

- 教師が常に子どもに対する思いをもって関わっていた。
- 子どもの状況を見て遊びを進めていた。室内から戸外に行くタイミングがよかった。子どもが待つことなく保育が進んでいた。
- 伝えたい相手に伝わる声の大きさと子どもたちと話していた。
- 子どもが教師に思いを伝えたい時に、聞ける態勢ができていて、子どもが満足するまで相手をしていた。

○環境構成（事実）—抜粋—

- 使いたい物がすぐに手に届く位置にあった。
- 試したり工夫したりできる環境がつけられていた。
- 刺激を受け合える環境があった。
- 子どもがやってみたくくなるような環境があった。 等

○環境構成のよさ

- いつも通りの環境が準備されていた。
- 少しずつ変化をつけながら設定して環境の再構成を行っていた。

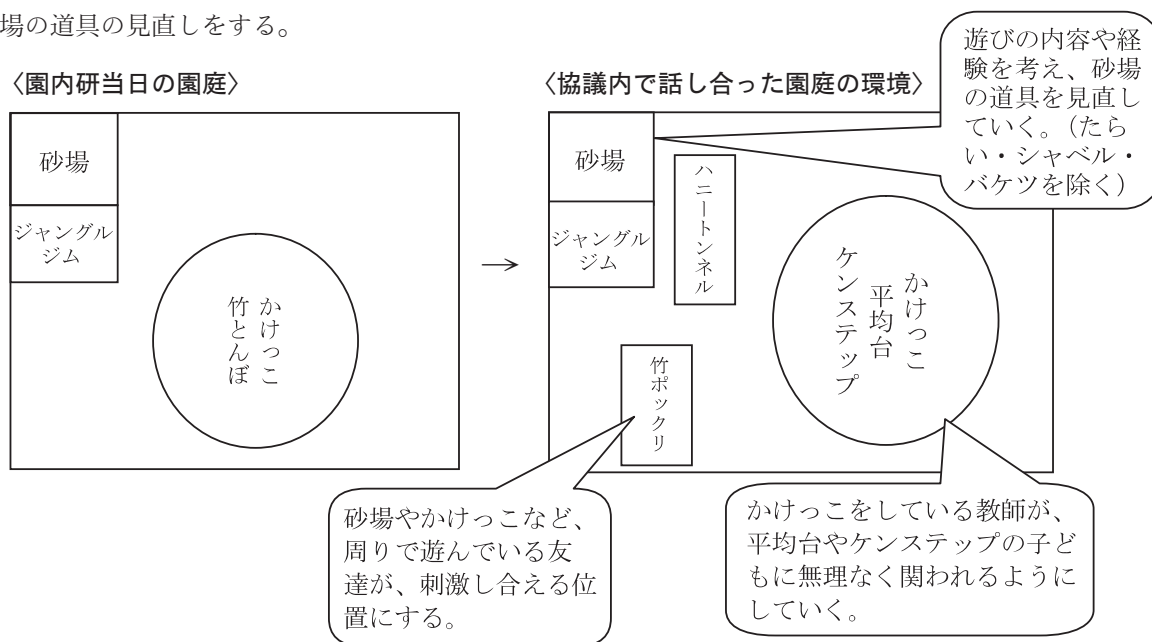
○子どもの実態

- 次にしたい遊びを選んで、何をしてよいか分からない子どもがいなかった。

視点③明日の保育につなげていくために。

※当日の悩み…朝は、雨が降っていたため遊戯室での遊びの予定で準備をしていたが、途中から晴れたため、急遽戸外遊びに変更した。そのため戸外の環境の準備を整えることができなかった。また、予想してなかった砂場遊びが盛り上がり、関わり方に戸惑ってしまった。そのため、子どもの姿と教師のねらいのずれが出てしまった。

- ・教師同士が声を掛け合い、職員全員で連携を取りながら子どもを見守っていく。
- ・近くにいる教師の力を借りて、外の環境を整えていくようにするとよいのではないか。
- ・子どもの姿を見て、巧技台やケンステップ等の運動器具を出してもよかったのではないか。
- ・園庭の環境を見直し、子どもたちが“遊びたくなる環境”を考えていく。
- ・砂場の道具の見直しをする。



4. まとめと今後の課題

戸外では、かけっこや竹ポックリをして遊ぶのではないかと予想し、ねらいを立てていたが、砂場遊びが盛り上がったことで、教師は関わり方に戸惑い、教師のねらいと子どもの思いにズレがあることを感じた。協議では、教師が、戸惑いながらも子どもたちが何を楽しんでいるのかを知るためにそばへ行き、トイや型はめを使って一緒に遊んだという話が出たり、どうしてそうなったかという要因を考えた時、かけっこや竹ポックリの遊びしかなかったことや、砂場には夏の遊びをイメージするような玩具しかなかったことから戸外遊びの環境が整っていなかったこと等が出されたりした。また、教師の援助として、緊張からあまり声をかけれていなかったことも分かった。その日の夕方には、担任が集まり園庭の使い方や環境を話し合ったり、砂場の玩具の見直しを行ったりした。園内研修をすることで、自分だけの捉え方や見方ではなく、他の職員の意見を聞くことで自分と違った意見に触れ多面的に捉えることができ、子どもを見る時の視野が広がることにつながった。協議を深めていったことで、次の日からの保育では、言葉のかけ方、援助の仕方、環境構成の仕方、子どもの遊びがどんなことにつながっているのかを自分たちなりに意識をして保育をするようになってきたことが大きな成果である。

課題として、教師は、ねらいや願いをしっかりともち、子どもの姿から事実をより正確に捉えることを意識し続け、日々の保育を積み重ねたり、新たな園内研修の仕方を取り入れたりし、幼児の内面理解をしていく努力を重ねていきたい。また、幼児期において育みたい資質・能力、5領域、そして、10の姿のつながりへの意識をもち、今後も5領域を通して育まれる“幼児期の終わりまでに育ってほしい姿”につながる保育の在り方を学び続けていくようにしたい。

## 高知支部

研究主題 「5領域を通して育まれる幼児期の終わりまでに育ってほしい姿につながる保育のあり方（幼児理解をもとにして探る）」

### 1. 研究にあたって

昨年度の研究では、子どもの内面を理解するためには、根拠となる事実を正確に捉えることが大切であることを学んだ。また、保育場面の動画を見て協議を行うことで、各時期の子ども達の育ちや願うべきことについての共通理解がなされたことが成果であった。

今年度は、教育課程を5領域から見直し、それをもとに月別指導計画、週日案を作成していることから、週日案のねらい・内容を基に行った保育事例を、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（以下「10の姿」という）から捉え直すことで、研究主題に迫りたいと考えた。

### 2. 研究事例

5歳児 はと組（男児14名 女児7名 計21名） 9月3日（木）

ねらい（○）内容（■） ※ねらい・内容に含まれる領域を、「健康→**健**」などと表記している。

○自分の力を精いっぱい出して遊ぶ楽しさや充実感を味わう。**健**

■思いきり走ったり、身をかわしたりして総合遊具付近で鬼ごっこやけいどろ、ハンターごっこを楽しむ。**健**

■園庭で自分に合わせた高さの高下駄に乗り、平らでないところやロイター板を通る。**健**

○友達と考えを出し合い、一緒に遊ぶことを楽しむ。**人 環 表 言**

■どうやって移動したら楽しいのか友達と考えながら、鳴子踊りをする。**人 言 表**

■たくさんのドングリ、落ち葉、枝、実をどうしたいのか、友達と一緒に考え、必要なものを準備しながら、製作する。**人 環 表 言**

#### 「ハンターごっこ」

1学期から、クラスの枠を超えて鬼ごっこを楽しんでいる年長の子ども達は、この日も10人程度が集まり、変わり鬼や氷鬼を数回楽しんだ。休憩中、ハンターごっこをすることになり、仲のいい女児3人がルールや遊び方を考え始めた。教師が女児3人とまわりの子ども達とのつなぎ役になってルール確認などを行いながら、初めてみんなで「ハンターごっこ」をする場面である。

事 例	10の姿から捉えた子どもの育ち
<p>A児・B児・C児は、タイヤの上に乗って、サッカーゴールの網にもたれながら、ハンターごっこをどうするか、話し合いを始めた。他の7名の子ども達は、その近くでタイヤに上がったり降ったり、サッカーゴールの網にもたれたりしながら、静かにA児達の話が終わることを待っていた。</p> <p>A児・B児・C児の話し合いは、早口で、互いの顔を見ながらテンポよく進んでいった。B児が「復活カードは何にする？」と言うと、かぶせるようにA児が「キッズハンター7人やと思う」と言ったので、B児も「キッズハンター何人にする？」と</p>	<p>・下線①で、テレビ番組の真似をして、ハンターごっこをしたくてたまらない3人は、矢継ぎ早に考えたことを言いながら話し合っている。下線②で、C児はキッズハンターをテレビ番組通りの「3人」と主張したが、A児はまわりにいる友達の人数を数えて見せてC児を説得している。</p> <p>このように『ハンターごっこ』をするという目的に向けて、互いに意見を出し合い、ルー</p>

言ってハンターの人数の話になった①。

C児が「3人」、B児が「じゃあ、大人ハンター2人？」と、A児が「キッズハンター4人おるで」と言い、B児が「キッズハンターは3人でえいろ」と言うと、A児が「4人おるがやもん、ほら。○くんと○ちゃんと○くんとCちゃん。はい、ハンタースタート！」と言った②。

まわりの子ども達への声かけもないままスタートしようとしたので、教師があわてて「待って待って、ハンターじゃない人は逃げたらいいの？捕まったらどうしたらいいの？」と聞くアと、B児は「捕まったら失格で」A児は「捕まったら牢屋に行って、復活カードを持って行ったら復活できるが、(人は)一人」と教えてくれた。教師が「牢屋はどこ？」と聞くと、「あそこのにんじん」と言いながら、C児が白線を指さした。教師が「先生わからんけど…みんなわかった？」と言うイと、D児が首を振ったので、「Dちゃんわからんって」と教師がその場にいた子ども達に言った。A児が「わからなかったら聞いて、誰でもいいき」と言ったが、D児は首を傾げ、困った様子で教師に抱き着いてきた。すると、A児が「じゃあさ、普通にさ、Dちゃんは捕まえるだけでいいよ」と言い、C児も「ミッションはせんでいいき」と言うと、D児がうなずいた。A児が「先生2人は手をつないで、誰から捕まえるか話して。誰かを捕まえて。幼稚園中行くきね」と言った。それを聞いて、B児は、「子ども達、こうやって」と言い、みんなで集まって手を重ね始めた。「えいえいおー！」と言うのを聞いて、教師は、「Fちゃんもいるよ」と伝えた。すると、B児は「はい、手をつないで」とF児に言い、みんなで声を揃えて、「えいえいおー！」と言って、ゲームが始まった。

数分経ち、教師は、大人二人で手をつなぐとなかなか捕まえられることを近くにいたE児達に相談した。教師が「何かいい方法ないかな」と困った様子で言うとウと、E児が仲間全員を呼び集めた③、集まった子ども達に、教師は「みんなに相談したいなと思って」と伝えた。すると、B児が「じゃあ、先生たち分かれたら？」と言ったので、教師は「じゃあ、3人バラバラで行ったらえいがやね」と確認し、ゲームを再開した。

ルや遊び方を決めていく3人の間には、協同性が育っていると考える。また、話し合っ  
て遊び方やルールを決めていく姿や自分の主張が相手に伝わるように、友達  
の人数を数えて見せ、相手もそれで否定しない姿などから、3人の間では  
言葉による伝え合いを楽しみながら、目的に向かっていく力も培われて  
いると考える。

・下線②のように、何の了承も得てはいないが、まわりの友達をキッズハンターに数えたり、「ハイ、ハンタースタート」と声をかけたりしている姿から、A児、B児、C児はまわりで待っている友達が仲間であると捉えていたことがわかる。しかし、自分達の目的を実現しようとすることに夢中で、早く『ハンターごっこ』を始めたいこともあり、まわりで待っている友達にまでは気が回っていない。友達にルールが伝わっていないことがわかると、教師に間に入ってもらいながらルールを伝えようとしている。教師に支えられながら、まわりの友達の思いに気づき、ルールを説明することで、気の合う友達同士だけではなく、まわりの友達に対する協同性にもつながっていくのではないだろうか。

・下線③のように、教師に相談を持ちかけられるとすぐに仲間全員を呼んだE児と、E児の呼びかけに集まってきた子ども達には、仲間意識があったのではないだろうか。1学期からクラスの枠も越えて一緒に鬼ごっこを楽しんできていたからこそ、仲間意識が育まれたと思われる。このようにみんなで楽しさを共有し、仲間意識を抱いている姿は、協同性の基礎となる育ちであると考えられる。

### 考察1

10の姿から保育事例を捉え直したことで、協同性が育つまでにそれぞれの子ども達がどのような育ちの過程にあるのかを確認することができた。A児・B児・C児の3人とその他の子ども達の間にも協同性を育てていくために、教師はどのような援助をしていたか、また、どのような援助が必要だったかを考える。

#### ◇10の姿につながる教師の援助

- ・破線部にあるように、教師はルールがまわりの子ども達には不明瞭であるにもかかわらずハンターごっこをスタートしようとするB児を制止して、やり方(破線ア)や、まわりの子ども達がルールを理解できたか(破線イ)を確認するなど、女兒3人とまわりの子ども達のつなぎ役となっている。この援助が3人の子どもと

まわりの子ども達の『協同性』を支え育もうとすることにつながっているのではないだろうか。なお、教師が3人の女兒にルールを確認するのではなく、まわりの子ども達に尋ねるように促すと『言葉による伝え合い』にもつながったと考える。

- ・教師は、大人2人が手をつないで鬼になると、なかなか捕まらないことは予想されただろうが、あえて子ども達が決めたルールにもとづいて参加している。そして破線部 $\square$ のように、子ども達にどうしたらいいか相談し、考えさせている。この子ども達の主体性を大事にした援助は、子ども同士の関わりにおけるモデルとなり、「ハンターごっこを楽しむ」ためにルールをどうしたらよいか考え合う育ちにつながるのではないだろうか。

### 考察2

研究事例を10の姿から捉え直すと、協同性や言葉の伝え合いが培われていること、協同性や言葉の伝え合いにつながる環境構成や援助をしなければならないことが分かった。このことを踏まえて、以下のようにねらい・内容を見直した。

#### ◇10の姿から事例を見直し、修正したねらい(○) 内容(■) ※下線部が修正した箇所

- 自分の力を精いっぱい出して遊ぶ楽しさや充実感を味わう。 $\square$ 健
- 思いきり走ったり、身をかわしたりして総合遊具付近で鬼ごっこやけいどろ、ハンターごっこを楽しむ。  
 $\square$ 健
- 園庭で自分に合わせた高さの高下駄に乗り、平らでないところやロイター板を通る。 $\square$ 健
- 友達と思いや考えを出し合いながら、遊びを進めていく楽しさを味わう。 $\square$ 人  $\square$ 環  $\square$ 表  $\square$ 言
- 鬼ごっこでルールについて自分の考えを言ったり、相手の考えを聞いたりして、遊びを進める。 $\square$ 人  $\square$ 言
- どうやって移動したら楽しいのか友達と考えながら、鳴子踊りをする。 $\square$ 人  $\square$ 言  $\square$ 表
- たくさんのドングリ、落ち葉、枝、実をどうしたいのか、友達と一緒に考え、必要なものを準備しながら、製作する。 $\square$ 人  $\square$ 環  $\square$ 表  $\square$ 言

#### ◇修正したねらい(○) 内容(■) の方向に育つための環境構成と援助

- ・話し合いの内容をホワイトボードに書くなどして、新しい遊びのイメージやルールを参加している子ども達で共有できるようにする。
- ・「○○じゃ鬼が捕まえるのが難しそう」「○○くんはどう思う」などと教師も子ども達と同じように参加者となって、一緒に会話を広げていくことで、子ども達同士が意見を出し合えるようにする。

### 3. まとめ

本研究をとおして、今の子ども達が10の姿のどの地点にいるのかがわかり、保育のねらい・内容、環境構成や援助を見直すことにつながった。5領域を通して保育を行っているが、10の姿から保育を見つめ直す必要性についても学ぶことができた。

小学校との共通言語となった10の姿をもとに保育を振り返り、「今、このような育ちにある」「この姿につなげるためにこのような保育を行っている」などと子どもの育ちや保育実践を伝えていくことで、幼小接続がさらに円滑になるのではないだろうか。



## 中部支部

### ○研究の方向性

今年度は主題に迫るため、各園が実態に応じて研究を進めながら、研究保育や写真、映像などから保育の具体的な場面を捉えた事例を基に子どもの表情や言葉、遊びの姿、友達との関わり方から幼児理解を深めた。子どもの育ちを5領域と照らし合わせながら幼児期の終わりまでに育ってほしい姿とつなげ、今の育ちを捉えることで、今後必要な援助や環境構成について探っていった。職員全体で共通理解を図り、研究で明らかになったことを今後の保育実践に活かしていくこととした。

### ○研究を通して見えてきたこと

- ・遊びの中で経験していることが幼児期の終わりまでに育ってほしい姿へどのようにつながっているのかを具体的な姿を通して考えることで、子どもの今の育ちや課題も見えてきた。幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を視点に子どもの姿をみると、5領域に示されている子どもの姿がより具体的に捉えられるようになった。
- ・異年齢が一緒に同じ遊びをする場面では、保育者は各年齢の発達を捉え、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿につながるように、各年齢のねらいを明確に持つておくことが必要である。各年齢のその時期に経験させたいことは何か、その経験ができるような保育者の援助や環境構成を考えていくことの大切さを再確認できた。
- ・幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を念頭に置いて、保育者は乳幼児期からの安定した人間関係や信頼関係を基に、発達の道筋を意識し、小学校以降の子どもの発達を見通した経験を積み重ねていくことが大切であると再確認した。
- ・研究を通して、自園の教育課程や指導計画について5領域のどの部分につながっているのかを確認したり、それぞれの時期に必要な環境構成や保育者の関わりについて振り返ったりすることができた。それを保育の中で実践したり、考え直したりすることを繰り返しながら、保育の質の向上につなげていくことの大切さを感じた。

### ○まとめと今後の課題

今年度は各園が具体的な保育の場面を通して事例に基づいての幼児理解がなされた。参観者の見方はそれぞれであるが、複数の職員による多面的な捉えにより、実践者も気付かなかった子どもの姿などを知ることができた。自分の保育を客観的に見てもらうことが改善点を見出していくことにもつながるので、今後もこうした研究協議を継続していくことが大切である。

そのためにも5領域の内容についての学びを深め、事実に基づいた幼児理解ができる保育者の目を養うことが必要である。そして、各年齢のそれぞれの時期に経験させたいことは何なのかを確かめながら、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿につながる援助と環境構成についてより具体的に捉えていくことが大切である。

コロナ禍で、いろいろな制約がある中でも各園が研究を進めることができた。各園の実態に応じて、限られた時間内で職員が意見を出しやすい研究方法を取るなどの工夫も見られた。職員全体で幼児理解を深めたりそれを共有したりしながら、今後の保育に活かしていきたい。

今年度は公開保育が実施できなかったが、DVDの映像を通して支部の会員が同じ場面を見て、いろいろな視点で話し合うことも大切ではないかという意見も出された。今後も社会情勢や各園の状況を踏まえながら、研究の仕方を模索したり確立したりしていくことで、これからの研究がさらに深まっていくようにしていきたい。

## 中部支部 南国市立たちばな幼稚園

研究主題 「5領域を通して育まれる幼児期の終わりまでに育ってほしい姿につながる保育のあり方（幼児理解をもとにして探る）」

### 1. 研究にあたって

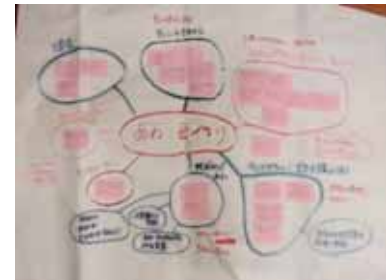
昨年度の園の研究では、4歳児の保育を通して、教師が遊びを楽しむことでその遊びの面白さを感じとり、子どもの視点から環境構成や援助を具体的に考えられるということを学んだ。しかし、子ども一人一人によって発達や成長、経験してきたことが違うため、その時に必要とされる援助が異なってくる。教師としてその子に今必要な援助は何かと悩むことがあり、その援助を考えるにあたって、一人一人の幼児理解が大切だと捉えた。

また、昨年は園内研修の前日と当日の写真の時系列に貼って見ることで、子どもの姿や遊びの経緯などを全職員が知ることができた。しかし職員によって実際の保育を見た場面が違い、研究協議も様々な場面となっていた。そこで、今年度は全職員が同じ場面の保育を見て、研究協議をすることができるようにするために、動画を撮り、ラーニングストーリーを用いて探ることとした。動画から見られる子ども達の表情や出た言葉、遊びの姿、友達との関わり方などから幼児の内面を探り、明日の保育につながる援助や環境構成、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」へのつながりを考えていくことで、日々の保育に活かしていきたい。

### 2. 研究方法

- 色水遊びの動画（20分程度）を全職員で見る。動画を見ながら付箋に気付いたことを書いていく。  
(付箋の内容：子ども達の遊びの姿を見て楽しんでいたところ、聞こえた言葉、教師の関わりや環境構成、自分だったらこんなふうにするという意見など)
- 付箋を出し合いながら、気付いたことを話し合っていく。
- ラーニングストーリー※1を用いて、出し合った意見をグループ化し、育ちとなっているところや、どのような経験につながっているかなど同じ用紙にそれぞれが書き足していく。
- 出た意見から、明日の保育にどのように活かしていくのか（援助や環境構成など）を考える。
- 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」へのつながりを考える。

※1 動画を見て、関連することを挙げて話を行う方法



### 3. 研究事例

6月10日（水） 5歳児

そらA組（男児10名、女児8名 計18名）      そらB組（男児9名、女児8名 計17名）

～これまでの姿～

【A男】は、走ることや身体を使って遊ぶことが得意で本児も自信をもっている。一方で、じっくり一つのものを作ったり、自分の気持ちを言葉にしたりすることなどは苦手である。苦手意識のあるものに対しては、自分か

ら関わろうとしないことや誘っても断ることが多かった。今回の色水遊びは、花びらだけでなく葉っぱを使っての泡作りなどを楽しみ、クラスの中で数日間続いていた。運動遊びを楽しんでいることが多い[A男]だが、前日(9日)は興味をもって参加し、友達から「先生」と呼ばれ友達に教える姿も見られていた。

事例 (A男の姿をおって)

幼児数名と教師がテラスで色水遊びをしていた。教師は子ども達の傍に座り、子ども達と同じように採ってきたシャボン草の葉をすりこぎとすり鉢を使って擦りつぶしていた。すると、A男がやって来て教師の傍に立ち、腕組みをしたり友達の作っているものを指差したりしながら、「そうそう、それでいいよ。」「違う違う、もっと擦って。」などと友達に向けて言った。(1)教師が「Aくんも一緒に作ろう。」と誘うが、A男は断るように首を振って泡作りを始めようとはしなかったがその場を離れようとしなかった。教師が園庭に葉を採りに行っているときもA男は友達の様子を立ったまま覗いている。たまに、腕をぶらぶらと振ってどこかに行くが、少しすると戻ってくる。

自立心

園庭に葉を採りに行っていたB男が教師に「どの葉っぱ採るが?」と聞いてきた。教師は、B男に「友達に聞いてみよう。」と言ってB男と共にテラスに戻った。A男に向かって「泡作る葉っぱどれか教えて。」とB男は伝え、(2)教師も「Aくん知ってるよね。教えてあげて。」と声をかけた。するとA男は、「えっとね、分かるよ。」と言って、友達が遊んでいた机に向き直り、机の上にあった葉を持ち、「これ!」と言ってB男に見せた。B男はA男に見せてもらった葉を持って探しに行こうとしたので、(3)「Aくんも一緒に行っちゃって。」と再びA男に声をかけた。するとA男は、一人で行こうとするB男に向かって「Bくん、ちょっと待ってくださーい!」と呼び止め、葉の場所を教えに向かった。葉を教えるときも、

協同性

言葉による伝え合い 1

「ここと、ここと。」「ここ全部そう。」とB男に言いながら何か所にも咲いていることを教え、A男も何枚か葉を採った。テラスに戻るとA男は、机にいる友達に向かって

「はい、葉っぱ!葉っぱ!」と自分が採ってきた葉を渡した。

A男はまた教師の傍に立ち、教師や友達に向けて「そうそう、それぞれ」などと言った。教師が「Bくん、泡の作り方教えちゃって。」とA男に伝えると、「えー。」とためらうように言ってその場を離れた。その後B男と葉を採りに行く姿は見られたが、A男が道具を持ち自分で始める姿はなかった。

言葉による伝え合い 2

考察

- ・前日A男は色水遊びや泡作りに参加しており、長い時間楽しんでいたこともあり、始めは遊びに参加しに来たのだと考えた。遊び始めの頃は泡を作りたいのではないかと思い、下線(1)のように言うが参加せず傍にいる姿を見て、誰かに作り方を教えたくて来ていたのではないかと思われる。
- ・何度も教師や友達に向かって、一方的に話掛けている様子から、前日に友達から「先生」と呼ばれていたことがA男の中に残っているのではないかと考えた。きっかけを作ることができるように、下線(2)(3)のように声を掛け、A男もすぐにB男を追いかけた姿から、A男の思いに合った援助だったと思われる。
- ・当日は子ども達が教え合うことができるための援助をしたいと考えて、教師はA男から離れた場所にいた。A男が遊びに参加できるようにと思い、きっかけとなるような声を掛け、援助を行ったことは良かったと思われる。しかし、作り方を教えるとなった際にA男が場を離れたため、その時にA男に対して友達への伝え方が分かるような援助ができていたら、事例での姿と違う遊びの終わり方ができていたのではないかと思われる。

## 4. 研究協議

A男の姿と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」とのつながり

②自立心	・遊びに自分から関わりに来ている姿はあるが、友達と同じように泡を作り始めなかったのは、A男は友達に教えたくて来ていたが、友達に対してどのように声を掛けて関わればいいのか分からなくて、立って腕組をしたまま声を掛けていたのではないか。
③協同性	・教師や友達に声を掛けられるなどのきっかけがあれば、友達を呼び止めて1対1で関わりをもつことができる。
⑨言葉による伝え合い	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 友達に自分の知っていることを教えようとする姿はあるが、「これ」や「葉っぱ」などの単語で伝えていることが多い。</li> <li>2 B男との関わりで、葉っぱの場所は教えるが作り方を教える姿がなかったのは、作り方や手順を言葉で伝えることがA男は難しいと感じ、できないと思っていたのではないか。</li> </ol>

A男の姿と5領域との関係

②自立心 ③協同性 = 「人間関係」

⑨言葉による伝え合い = 「言葉」

- ・A男には、特に言葉での伝え合いの部分に援助が必要だと考えられる。

「言葉」 ・日常の会話の中でも、A男と話すときは意識して質問などをして、言葉を並べて具体的に話すことができるような機会を意図的に作っていく。

- ・自信があることや得意なことを活かすことができるような場面では、考えたことを言葉で伝え合う場面を作り、A男が考える機会や、伝えることでの成功体験を増やしていけるようにする。

10月頃のA男の姿として、教師が促すと、友達にやって見せながら教える姿やクラスみんなで疑問に思っていることを家族に聞き、友達に伝えたい姿が出てきている。研究協議を通して、A男に対する具体的な援助を考えることができ、実際にやってみたことで、A男の姿が少しずつ変わってきている。

## 5. まとめ

- ・これまでK J法を用い、全職員が同じ立場で意見を言うことができるようになってきたため、今回新しい試みとしてラーニングストーリーを取り入れた。動画を全職員で見合う研究方法を試して、見合ったことによって、焦点を絞って見ることができた。同じ場面の動画を見ても、子どもの表情や面白さを感じているところなど内面の読み取りはそれぞれである。それぞれの視点での読み取りを、遠慮せず出し合える方法であったため、意見が次々出てくる協議となり、限られた時間の中でも、幼児理解を深めることができた。また、保育をした側も、保育中には気付くことができていなかった子ども達の言動や表情、自分の保育などを客観的に見ることができ、反省点や改善点を見つめやすくなるなど、良い点も多くあったため、このような全職員が遠慮せず意見を出し合える方法を確立していけるようにすることもこれからの課題である。
- ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に向けては、3歳児からどのようなねらいをもつか、どのような経験ができるのかななどを、各学年で考える機会となった。色水遊びの事例を通して、各年齢が遊びの中で意識して保育することへとつながった。
- ・A男をおって研究協議をしていくなかで、子ども達一人一人に合った援助をするための幼児理解では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」や5領域で捉えることで、今の子どもにどのような経験や援助、環境構成が必要なのかを具体的に探ることができた。これからも一人一人に合った援助を考えることができるように5領域や子どもの姿と照らし合わせながら幼児理解を大切にしていきたい。

## 中部支部 高知市立かがみ幼稚園

研究主題 「5領域を通して育まれる幼児期の終わりまでに育ってほしい姿につながる保育のあり方（幼児理解をもとにして探る）」

### 1. 研究にあたって

昨年度の研究では、子どもの興味や気付きなど、参観者が見た事実を基に、子どもの内面を推し量り、子どもの育ちが「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」のどの部分につながっているのかを探り、ねらいや内容の捉え直しや環境の再構成を行うことで、子どもの変容の過程が見られ、より深く幼児理解ができた。また、子どもの育ちをどのように理解したのかで、環境構成や教師の振り返り方も異なってくることも再確認できた。

今年度は5歳児A男の事例を通して、幼児の内面や育ちを多面的に捉え、今の育ちを読み取り、5領域とのかわりや幼児期の終わりまでに育ってほしい姿につながっていく教師の援助や環境構成について探り、研究主題に迫っていきたい。

### 2. 研究事例

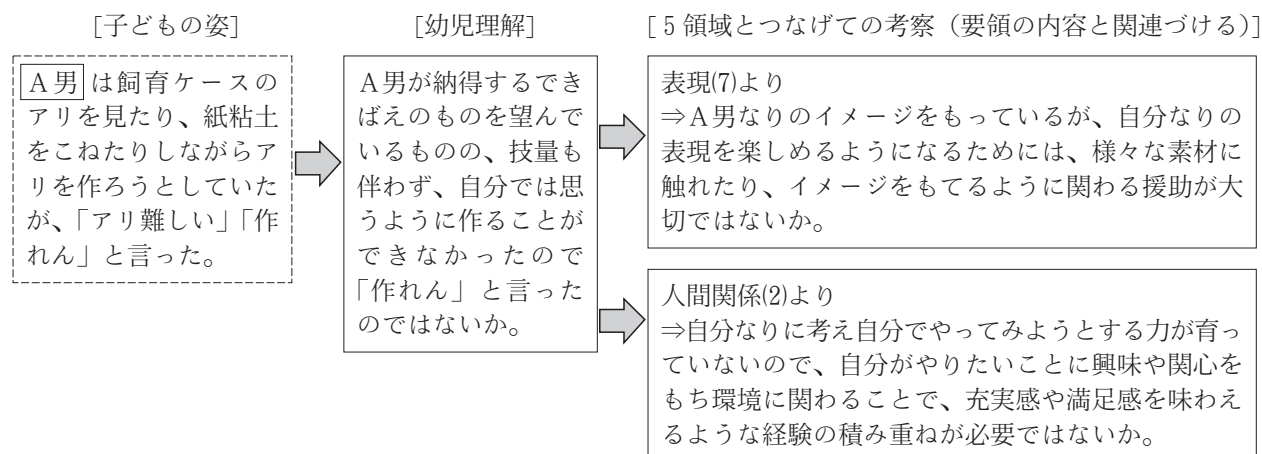
9月18日（水） 5歳児すみれ組（男児4名 女児5名 計9名）

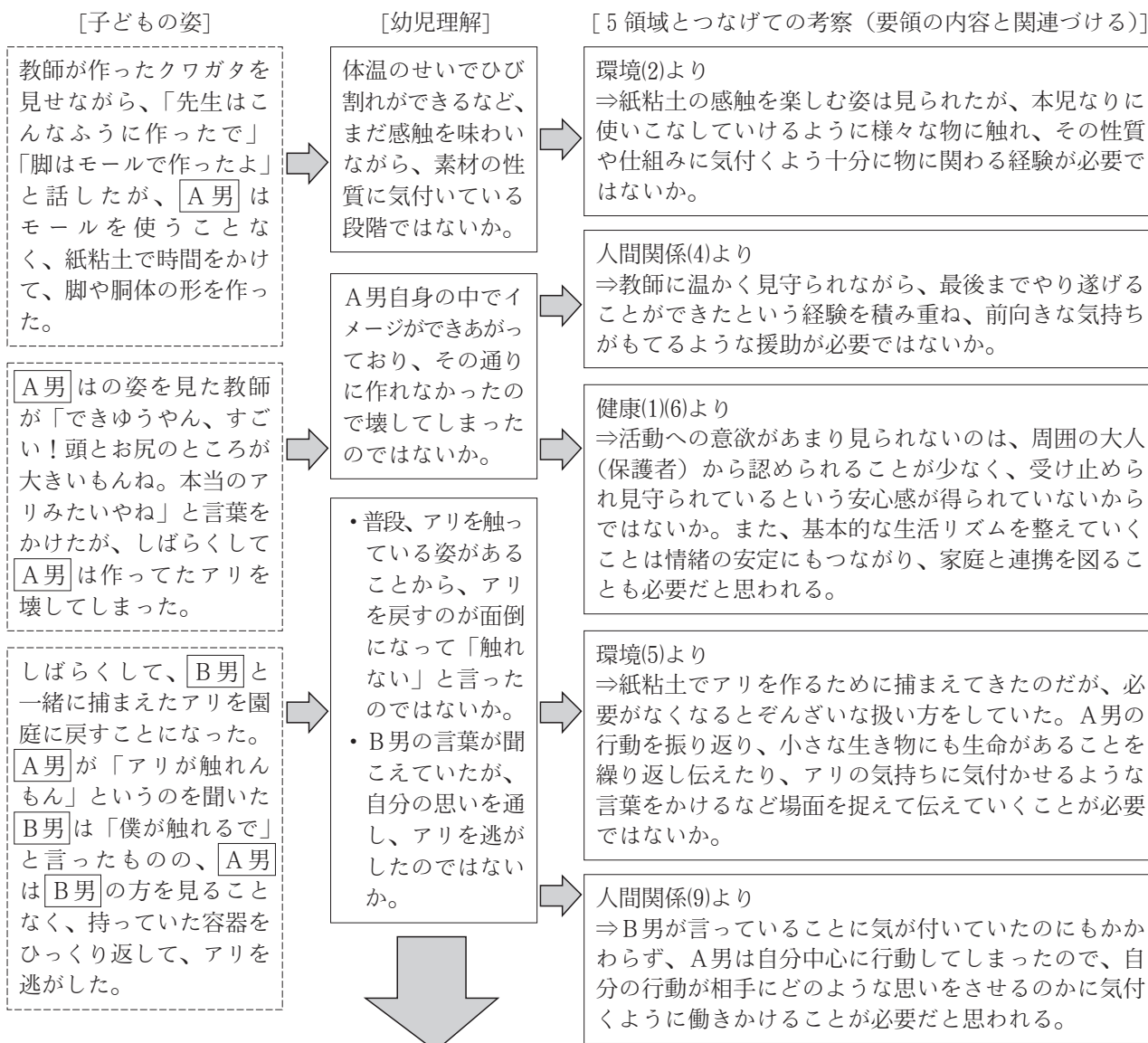
#### (1) 教師が捉えたA男の日頃の姿と教師の願い（事例に関するものだけを抜粋）

明るく活発な性格ではあるものの、相手の話を聞かずに自分の思いだけで行動したりする姿が多い。日頃から教師に思いや感情を思いのまま出したり、人懐こく関わってくる姿から保護者との関わりの中でA男の気持ちが満たされていないのではないかと思われる。またイメージしたものを作ったり、表現したりすることにやりたい思いがあっても、自分が思ったようにできないとすぐに諦めてしまう傾向もある。このような姿から相手の話を聞き、友達と折り合いをつけながら生活や遊びを進めていく楽しさを味わったり、A男が自信をもち自分なりに表現することを楽しめるようになってほしいと願っている。

#### 【事例】 A男が紙粘土で生き物を作る場面より

教師が作った園庭の総合遊具の壁面飾りに興味をもち、園庭で見たことがあるバッタやトンボなどの虫を作ることになった。前日、教師が作りかけていたバッタに興味をもった子どもは、クラスで飼育しているクワガタを紙粘土で作りはじめた。当日、A男は生き物を作ろうとB男と一緒に園庭にいるアリを捕まえてきた。アリを飼育箱に入れ、それを見ながら紙粘土でアリを作ろうとし始めた場面である。





**考察より導かれたA男にとって必要な経験とそれにつながる教師の援助(★)と環境構成(■)**

◎素材を十分に味わいながら試したりする経験(思考力の芽生え、言葉による伝え合い、豊かな感性と表現)

- ★様々な素材をじっくりと試したり十分に触れたりする体験を通して気付いたことなどを教師や友達に伝えようとする姿を認めたり、遊びながら素材の特徴などにも気付かせていく。
- 心と体を働かせて物とじっくり関わることのできる環境を構成していく。用具や遊具など興味をもちそうなものを用意する。

◎自分のやりたいと思ったことを最後までやり遂げる経験(健康な心と体、自立心)

- ★自立の基礎となる健康な生活のリズム(十分な睡眠やバランスのよい食事)を身に付け、他者(教師・保護者)との信頼関係の下で、安心して自分のやりたいことに向かって取り組めるようにする。
- ★**A男**が何かに取り組もうとしている時には、**A男**と手順を確認するなど、見通しがもてるように援助し、最後までやり遂げた達成感や満足感が得られるようにする。
- わかりやすく文字や絵で予定や流れを示すなど、視覚支援を用いる。

◎自分の思いだけで行動せず、友達の話聞き、相手にもわかるように伝える経験(協同性、道徳性・規範意識の芽生え、言葉による伝え合い)

★状況に応じて教師が仲介役になるなどして、自分の思いが相手に伝わり、遊びがより楽しくなったなどの体験を積み重ね、相手の思いも感じられるようにしていく。相手の立場になって考えたり、葛藤を繰り返す中で、自分の気持ちの調整や折り合いをつけられるように援助していく。

◎生き物に親しみをもって接し、生命の尊さに気づき、いたわったり大切にしたりする経験（自然との関わり・生命尊重）

★生き物に触れたり、世話をしたりする中で、親しみや畏敬の念を感じられるようにしていく。

## (2) A男の姿を考察する中で見えてきたクラスの子どもの姿

この日の保育では、いろいろな環境を用意し、教師がそれを知らせるなどの援助をしたものの、皆が同じ場所で同じような虫作りをする姿が見られていた。日頃から友達や教師に察してほしい依存的な姿も見られることから、友達と同じ場で、同じようにして遊ぶことで安心しているのではないかと思われた。そのことから「人間関係(2) 自分で考え、自分で行動する」ことがクラスの課題（育ってほしい姿）だと再確認した。

～今後の保育（クラス全体）へつなげるための教師の援助（★）と環境構成（■）～

### ●自分の気持ちを表現し、友達との関わりがもてるようになるために

★友達や教師と心を通わせる経験を通して、豊かな言葉や表現を身に付けたり、自分の気持ちを伝えたりしながら、言葉のやり取りの楽しさが感じられるようにしていく。自分なりに表現することの喜びを感じたり、遊びの準備をしながら友達との会話を楽しめる機会をつくっていく。

■日頃、ペープサートを作って遊ぶ姿が見られていることから、ペープサートを使って友達と言葉でやり取りを楽しめるようにしていくことも考えられる。

### ●自分なりの表現を楽しめるようになるために

★教師が新しい素材を提案し、それを使って生き物を作ることはつながらなかったが、今後も素材の提案をしたり、いろいろな使い方があることを教師が見せて知らせる援助を繰り返していく。

■より本物らしいものを作りたいと考えているものの、技量が伴わなかったり、イメージしにくかったりする子どもに対しては、実物を見せるよりは、抽象的な絵やイラスト、教師が作ったものなどを子どもの目につきやすいところにおくことで、作りやすくなるとも考えられる。

### ●協同性への育ちにつなげていくために

★子ども同士が関わり合う活動の中で、それぞれの持ち味を発揮し、互いのよさを認め合える関係をつくっていくように援助していく。

■広い机の上に草などを用意し、できあがった生き物を置くことができるようにしておくと、それぞれの作ったもので遊んだり、それに関心をもったり、「こんなものもあればいいね」といったアイデアも出てくるかもしれない。

## 3. まとめと今後の課題

5歳児A男の事例を通して、5領域の内容と照らし合わせながらA男の育ちと今後の援助を考えることで、クラスの子どもの実態も見えてきた。要領の内容と照らし合わせて子どもの育ちを捉えたことで、具体的にそれぞれの発達をおさえ、発達の道筋を意識して援助や環境構成を考えていくことの大切さも再確認できた。また、図式を取り入れたことで、今後必要な経験や教師の援助、環境構成を整理して捉えられたことも大きな成果である。今後もこのような手法を用いて職員全体で共通理解を図り、個々の育ちとクラス全体の課題と5領域とを結びつけながら、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿につながっていくような援助や環境構成を考えていきたい。

## 中部支部 いの町立幼保連携型認定こども園えだがわ

研究主題 「5領域を通して育まれる幼児期の終わりまでに育ってほしい姿につながる保育のあり方（幼児理解をもとにして探る）」

### 1. 研究にあたって

5歳児うみ組では、以前から仲のいい友達と関わって遊ぶことを喜び、自分の思いを伝えながら遊ぶ姿が見られている。保育教諭は友達との関わりの中で、自分の思いを伝えるだけでなく友達と意見や考えを出し合ったり、友達の思いも受け入れたりしながら自分達で遊びを進めていけるようになってほしいと願っている。今のクラスの現状や子どもの育ちを読み取り、幼児理解を深めていくために、子ども達がやりたい遊びに向かって取り組む場面を事例に起こした。研究を進めていく職員で一つの場面を共有し、その遊びの中で子ども達が経験していることを探り、その姿につながった援助・環境構成を考える。そして子どもたちが経験していることは「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」のどこへつながっているかを考察する。また、今の子どもの育ちから今後経験してほしいことを考え、それにつながる援助や環境構成を探り、研究を進めていきたい。

### 2. 研究事例

5歳児うみ組 研究保育 7月15日（水）（男児16名、女児11名）

ねらい（○）と内容（●）

- 互いの思いや考えを伝えながら、友達と一緒に遊びを進めようとする。
- 考えたり工夫したりしながら、自分なりにイメージしたものを作って遊ぶことを楽しむ。
  - 友達と互いのイメージを伝え合いながら、夏祭りごっこをして遊ぶ。
  - 考えたり工夫したりしながらイメージしたものを作る。

#### 夏祭りごっこの遊びから

夏祭りでは本物の竹や樽を使って「火炎太鼓」の演奏をした。その夏祭りの経験から、筒をつなげた竹太鼓やミルク缶に段ボールやガムテープを巻いた樽太鼓を自分達で作り、お客さんと呼んで「火炎太鼓」の曲に合わせ、太鼓を叩いたり踊ったりするという遊びを数日前からしていた。

登園後の所持品の始末が終わるとすぐに、**A男**がとても明るい声と表情で「今日も火炎太鼓したい」と言った。保育教諭が「いいね、お友達も誘ってやろう」と言うと、迷うことなく**B子**を探し「**B子**ちゃん、今日も火炎太鼓一緒にしよう」と声を掛けた。**B子**は「いいね、やろう。今日は何組さん呼ぶ？」と言い、遊びの準備を始めた。その様子を見ていた**C子** **D子**も「やりたい」と言い、遊びに必要なスティックボンボンやバチを広告紙、スズランテープを使って作っていた。広告紙を巻いたり、ボンボンを作るためのスズランテープを束ねて割いたりすることに時間が掛かり、片付けの時間が近づいていた。

保育教諭は「お片付け4になったらするけど、どれくらいになったら火炎太鼓する？」と**A男**に問い掛けた。すると**A男**は「じゃあ3になったら」と答え、筒を約3メートル程つないだ竹太鼓、ミルク缶などで作った樽太鼓5つを運んできて、椅子を4つ並べた上に設置した。さらに**A男**は竹太鼓の下に並べた椅子を等間隔に調整したり、樽太鼓と椅子の数を数えて椅子を付け加えたりしていた。設置が完了した頃、



「D子」とスティックポンポンを作っていた保育教諭が「A男」に「お客さんは？」と尋ねると「A男」が「呼んでくる」と保育室から飛び出て行こうとした。保育教諭が慌てて「D子ちゃんも行きたいやって」と「A男」を呼び止めると、「A男」は保育教諭と「D子」のところに戻ってきた。保育教諭が「D子」に「A男君が（ポンポンの持ち手を）丸めるの上手にできる名人で、A男君に教えてもらおう？」と言葉を掛けると、「A男」はすぐに「いいよ」と言ってスティックポンポン作りを手伝った。

そしてそれが出来上がると「できたで」と「D子」に言い、「A男」「B子」「C子」「D子」で急いで小さいクラスの友達を呼びに行った。2歳児クラスの友達が来てくれると、「A男」は「B子ちゃん！オーケー？はじまるでー」と声を掛けた。「A男」自身はCDをかける役をしていた。保育教諭が「A男君がやりゆうところも見てみたい」と言うと「A男」は「恥ずかしい」と言い踊る事はなかった。「A男」は皆が踊っている間ずっと、CDデッキの横でニコニコしながらリズムに乗って小さく体を動かしたり、両手の人差し指をバチのようにして叩いたりしながら皆の様子を見ていた。

そして曲が終わると「B子」が「まだまだ、並んで」と言い、皆でお客さんに「見てくれてありがとうございます」と言った。その後、竹太鼓を片手で脇に抱えて持ち、数名の子どもで片付け始めた。階段の踊り場では「A男」が「そうやない、そうやない、こう」と言い、竹太鼓が壁に当たらないように向きを変えながら慎重に運び、2階のプレイルームまで自分達で片付けた。

### 3. 研究協議

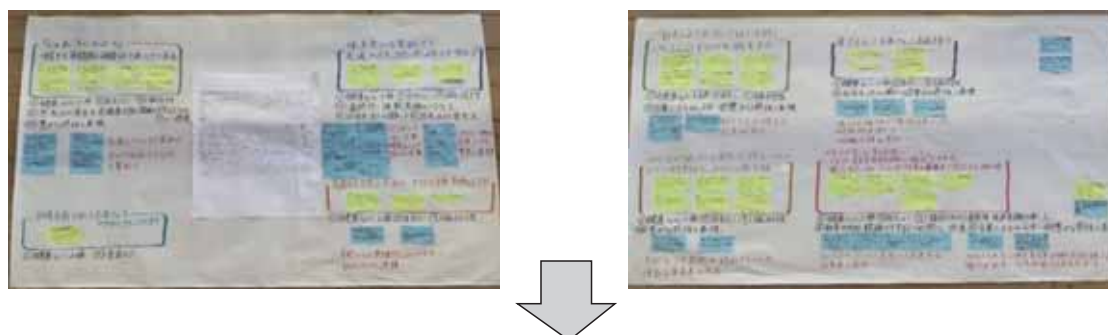
遊びの場面ごとに子ども達が経験していることを考察し、付箋に書いて出し合った。そしてそれは「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」のどこへつながっているかを考えた。

協議の流れ（ポンポン作りの場面を例にして）

下線部より読み取った子どもたちが経験していること  
（幼児期の終わりまでに育ってほしい姿につながる部分）

- ・保育教諭に自分のできることを認めてもらった嬉しさを感じ、保育教諭や友達に頼りにされることで自信をもつ（①健康な心と体、②自立心）
- ・友達と協力して目的の実現に向けてやり遂げようとする（③協同性）
- ・友達の役に立つ喜びを感じる（⑤社会生活との関わり）

上記のように、遊びの場面ごとに経験していることを話し合った。



夏祭りごっこ遊びの中で考えられる「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に結びつくところと「5領域」へのつながり

(話し合いより抜粋)

② 自立心

自分達のやりたい遊びに向かって、アイデアを出し合いながら考え、工夫して作る。自ら考えようとする意欲と思考の芽生えが期待できる。その工夫を自分達の力で実現することで達成感も生まれている。また、自分を認めてもらうことや、自分の考えに応えてくれる嬉しさなどを感じ、自信につながっている。

「健康」「人間関係」

③ 協同性

共通の目的の実現に向けて、考えたり工夫したり協力したりしている。さらに、竹太鼓の持ち方を工夫したり、向きを変えたりしながら友達と協力して片付けた。準備から片付けまでの全てに、充実感をもってやり遂げている。「人間関係」「言葉」

⑥ 思考力の芽生え

片付けの時間に見通しをもち演奏を始める時間を決めたり、友達の姿に気付いて手伝おうとしたりしている。竹太鼓の長さを考え、持ち方や運び方を工夫している。「環境」「言葉」

⑩ 豊かな感性と表現

自分達で遊びをつくり上げていく楽しさや披露することの嬉しさ、達成感を感じている。遊びの場を整える姿は、保育教諭がしていたことの再現であり、保育教諭への憧れや、遊びをリードする楽しさが表れている。できることを認めてもらう嬉しさ、考えを伝えたことに友達に応えてくれる嬉しさなどを感じ、自信につながっていく。「言葉」「表現」

この協議より、一つの遊びの中に「10の姿」につながる経験が多く含まれていることがわかった。

次に、今の子どもの育ちから、今後保育教諭が子どもたちに経験してほしいことを聞き取り、どのような援助や環境構成があるといいかを話し合った。

[子どもたちに経験してほしいこと]

- 友達と同じ目的をもって、自分達で遊びを進めていけるようになってほしい。
- 友達との関わりの中で、相手の気持ちに気付いたり、気持ちに折り合いをつけたりすることができるようになってほしい。

[そのために必要な援助・環境構成]

- 保育教諭の働き掛けだけでなく、子ども自身が友達の思いに気付くことができるような言葉掛けをしている。
- 遊びを見守るだけでなく、保育教諭も一緒に遊ぶことで子どもたちがより楽しさを感じ、主体的に遊びを進めていくことができるようになるのではないかな。
- 片付けの時間に間に合わず演奏できなかったなど成功できない経験もすることで、子どもたちが考えるきっかけをつくっていく。
- まずは自分の思いを受け止めてもらうことで、安心して自己を表現できるようにしていく。また、友達との関わりの中で心を動かす経験を積み重ね、いろいろな感情を共有する場をつくる。その中で、相手の思いを知ったり受け入れたりすることができるようになり、互いの良さを認め合うことにもつながっていく

のではないか。

#### 4. まとめ

遊びの中で経験していることが「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」へどのようにつながっているのかを具体的な姿を通して考えることで、今の子ども達の育っているところや今後の課題が見えてきた。また、「10の姿」を視点に子どもの姿を見ると、5領域で示されている子どもの姿がより具体的に捉えられるようになった。この遊びの場面一つの中にも「10の姿」のすべてが当てはまっていたことから、生活や遊びが総合的な活動であることを意識した援助や環境構成が大切だと学んだ。

これらは年長児になり突然身に付くことではなく、安定した人間関係の下で育まれていくことから、乳児期から“就学までを見通した関わり”の大切さも再確認することができた。

今後も、子ども達の生活や遊びが「10の姿」のどこにつながっているかを意識しながら、今の子ども達の育ちを踏まえ、必要な保育教諭の援助や環境構成を考えていきたい。

## 中部支部 いの町立伊野幼稚園

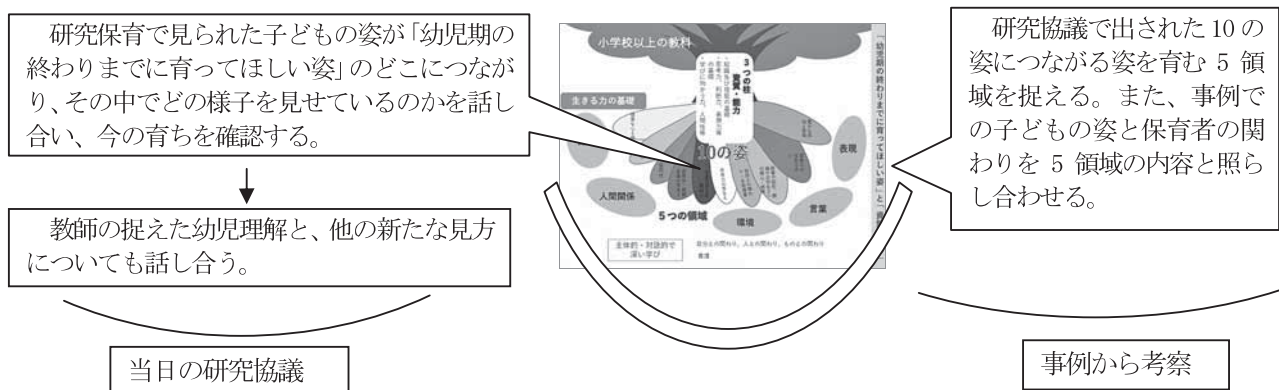
研究主題 「5領域を通して育まれる幼児期の終わりまでに育ってほしい姿につながる保育のあり方（幼児理解をもとにして探る）」

### 1. 研究にあたって

昨年度の3歳児の研究保育では、教師が、一人一人の今の興味や育ちをしっかりと捉えることで、その子のその時期にふさわしい環境構成や援助が見えてくるということを学んだ。また、教師と一緒に遊び、楽しさを他の子どもにも伝えていくことで遊びを通じたつながりが広がっていくということも分かった。その子どもたちが4歳児となった今年度、3、4歳児混合クラスとなり、生活を共にする中で、成長と共に新たな課題が見られている。4歳児の育ちを大切にしていくために、どのような環境構成と援助が必要になるのかを研究保育の場面を通して考えていきたい。

### 2. 今年度の研究方法

- ・3、4歳児にじ・ひかり組の保育参観後の研究協議をKJ法で行う。年齢や経験に関係なく意見を出しやすく多様な意見が聞けることや、見た場面が違っていても、いくつもの事実を集めることで考察を深めるためである。
- ・その後、担任が、当日の保育動画を確認し、協議の中心となった場面の映像から事例をおこす。また、研究協議の内容を踏まえて明日の環境構成と援助についての考察をする。動画を活用することで、正確な事実に基づいて研究するためである。



### 3. 研究内容

研究保育 10月14日（水） 伊野幼稚園 3、4歳児にじ・ひかり組  
 4歳児（男児6名 女児5名 合計11名）  
 3歳児（男児3名 女児2名 合計5名）

4歳児のねらい（○） 内容（●）

- 土や砂、水に触れて遊ぶ楽しさを味わう。
  - 砂場に穴を掘って水を流したり、泥団子を作ったりする。
- 友達に自分の思いや考えを伝えながら遊ぶことを楽しむ。
  - 友達と一緒にルールのある遊びをしたり、空き箱や折り紙などを使って自分のイメージした物を作ったりする。

○身の回りのことを自分でしようとする。

- ・身支度や着替え、手洗いなどを自分で進んで行おうとする。

保育の視点 1、どんなことに興味や関心をもって関わり、どのように遊んでいるか。

2、その遊びを通して、どのような感情がわき上がっているか。その姿が「10の姿」のどの部分につながっていると思うか。

3、よかった環境構成と援助を考える。

4、本日のねらいに基づき、明日の保育では、どのような環境構成や援助が求められるか。

### 【教師の願いと課題】

- 友達と誘い合って同じ遊びを楽しんでいる子どももいるが、いつも教師と一緒に遊ぶことで安心している子どももいる。そのような子どもが、教師としている遊びに友達が来てくれたら嬉しそうな表情を見せるようになってきた。今は自分からは行けなくても、それぞれが友達に興味をもっている時期がきたように感じる。友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わってもらいたい。また、友達の素敵一面に気付いてもらいたい。
- 遊びの中で、教師が入ったらうまくいくようなことが、友達同士なら思い通りにいかないこともあるので、あえてそれを経験し、葛藤するような体験も味わってほしい。しかし、個々にすぐ教師に訴えかけに来る。

当日の研究協議では視点2で、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の③協同性 ⑨言葉による伝え合いにつながる姿が多く見られた。また、前述の教師の願いと課題で友達との関わりについて考察したい思いがあったので、この場面を選んだ。

### たたかいごっこの場面

4歳児の[A男]が[B男]と虫取りをしていたが、徐々に虫がいなくなり[B男]は[C子]とたたかいごっこを始めた。[A男]はそこで一緒に遊ぼうとしたが、やめて別の友達と2人で園庭の塀にもたれ、しばらく座った。教師は近づいて「何して遊んでいたの？」と声を掛けた。「何もしてなかった」と答えた。続けて「たたかいごっこをしてなかった？」と教師が聞くと[A男]は視線をそらしたまま「つまらん～！つまらんつまらん！」と呟いた。「何がつまらんかった？」と教師が聞くと「だってよ～B君がげんこつしてくる、Cちゃんも攻撃してくる」と答え、教師が「やめてって言うてみたらいいんじゃない？」と言うと、視線を下に向けた。

教師が「今度困ったら先生に言ってね。一緒にやめてって言うてみよう」と声を掛けると、[A男]は「一緒に言う」と答えた。「困っていたのなら言うてみよう、1人で言うのドキドキするもんね」と教師が言っていると、そこへ[C子]が走ってきた。「(うんていしていた所を)見てくれた？」と聞く[C子]に、教師は「見てなかったあ。あのね、Cちゃん、A君が何か困っているみたい」と声を掛けた。言葉を聞いた[C子]は視線を落とし、続けて教師が「何か知っていることある？」と聞くと「たたかいごっこしよってよ、



A君が鬼だから、たたかいよった」と話した。教師が「そっか、一緒に遊んでいたのかな」と言うと、[C子]は「一緒には遊んでなかったけど、追いかけてたりした」と答えた。教師が「うん。A君は、さっきCちゃんが言うてくれたのと同じこと言いよった。たたかいごっこね、Cちゃんが攻撃してくると、ちょっと困ったなあって」と言うと、[C子]は頷き「遊びよって、攻撃の技でやってしまった」と答えた。

教師が「そうかそうか、ちょっと強くやってしまったのやね」と言うとC子は頷いた。続けて「何かね、ちょっと痛かったみたい」と教師が声を掛けると、C子は視線をそらし少し考えた後「やったら叩く真似っこにする」と答えた。教師はA男に「Cちゃんが叩く真似っこやったらどう？って言ってるけど、いいかな？」と声を掛けた。A男は「(それなら) いい」と答えた。

その後も教師が「どう？さっきCちゃんが言いよったみたいに、たたかいごっここのときはたたかう真似っことかできる？」とC子に確認し、さらに「たたかいごっこしたくないときは「僕したくない」って言えそうかな？」とA男にも確認した。

【当日の研究協議の考察】

視点1、2について協議する中で、A男の表情や言葉から、担任が考察したこと

○担任はこれまでの関わりの中から、A男は、嫌なことがあったときや不安なときに、思いを伝えることを遠慮する姿があると捉え、今回の場面で、A男の思いをじっくりと聞き、相手に代弁して伝えるような関わりをした。しかしA男の姿を振り返ると、今回の場面では、A男は教師に対して“言葉”“動作”“表情”などで自分の思いを表しており、これまでとは違った姿のように見られた。子ども同士の関わりが増えるように願うのであれば、A男の思いを聞いて受け止めながらも、教師が仲立ちしすぎず、自分たちなりにやり取りをする姿を見守る関わりでもよかったのではないか。

言葉で表しているところ	「つまらん～！つまらんつまらん」と呟いている。
動作で表しているところ	園庭の塀にもたれてしばらく座ったり、教師の問い掛けに視線をそらしたりしている。教師が「やめてって言ってみたらいいんじゃない？」と声を掛けると、返事をしない。
表情で表しているところ	事例の写真参照。(教師に視線を合わさず遠くに向けて、つまらなさそうな表情)

教師の願いを踏まえて、視点3、4から明日につながる環境構成と援助について考えたこと

○子どもが、他の子のしている遊びに興味をもてるように、朝や降園活動の時間を活用し、「○○ちゃんが、こんな楽しいことしていたけど、他のお友達に教えてあげて。」などと投げかけ、自分なりの言葉で伝え合う場を設けてみると、遊びや関わりが広がるきっかけになるのではないか。

講師助言より

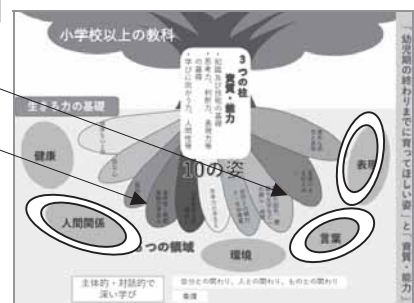
○日常の様々な出来事があった場面で、近くにいる子どもたちに教師が投げ掛け、話し合いをする場を作り、思いをその子なりの言葉で言い合えるような援助をしてみることで、友達の思いを知ることができたり自分なりの思いを伝えたりする力が育つのではないか。

協議の視点2で出た付箋をまとめると③協同性 ⑨言葉による伝え合い

につながる姿への考察が中心であった。

これは(人間関係 言葉 表現)の領域を通して

育まれると考え、内容を参考に考察を深めた。また、事例の場面にはその他の10の姿も含まれていることにも気付いた。そこで、その他の領域(健康)(環境)のねらい・内容を参考に、さらに考えられる環境構成と援助を探った。



**健康**

○A男はこの時期、中当てドッジボールやケイドロなどルールのある遊びに興味をもち、友達と一緒に楽しむ姿が見られていた。幼児が自ら積極的、主体的に選択して、いつでも遊び始められるようあらかじめラインを引いておいたり必要な道具を準備したりしておくなど遊びの選択肢を広げていくような環境の構成が必要であったのではないか。

○A男が自ら興味をもって選択した遊び“虫取り”を大切にするのであれば、園庭にこだわらず、近くの公園と一緒にバッタを探しに行くなどの関わりもあったのではないか。

**環境**

○A男は虫がいなかったため別の遊びを始めたので、虫がいなきには、葉っぱの裏や土の中など他の探し方を試行錯誤できるような投げかけがあれば続けて虫取りできたのではないか。また、なぜ虫がいなきかを考える関わり（気温や天気、気候など季節による変化も感じられるようにする）や育てる大切さや逃がす場所も一緒に考えるなどの関わりがあればよかったと思われる。

#### 4. まとめと今後の課題

今年度は、園内研で保育を撮影し、研究協議後に協議の中心となった場面を動画で確認しながら、研究主題にせまった。一つの場面の中にもいろいろな「幼児期の終わりまでに育ててほしい姿」が現れていることが分かり、子どもの育ちは様々な要素が相互に関連し合っていることが分かった。さらにその姿を育むそれぞれの5領域のねらいに子どもの姿、また、内容に環境構成と教師の援助を照らし合わせてみることで、新たな考察をすることもできた。課題としては、2時間の動画を確認するのに当日の研究協議の資料として使用するには間に合わないことや、見たい場面が撮れていないこともあった。次年度は、当日の協議とは別に再び動画を見て協議する計画をしたり、普段の保育の場面など別の映像で研究協議したりするなど新たな方法を取り入れていきたい。また、自園の教育課程や指導計画について、5領域のどこにつながっているのかを確認したり、それぞれの時期に必要な環境構成や教師の関わりについて振り返ったりして、保育の質の向上に生かしていきたい。

## 中部支部 いの町立幼保連携型認定こども園ごほく

研究主題 「5領域を通して育まれる幼児期の終わりまでに育ってほしい姿につながる保育のあり方（幼児理解をもとにして探る）」

### 1. 研究にあたって

以前より5歳児は、製作遊びを好み、運動遊びやルールのある遊びはあまり興味を示さず、遊び始めてもすぐにやめて他の遊びに向かう姿があった。5領域を通した育ちを考えた時に、個々に好きな遊びを楽しむだけでなく、友達との仲間関係をつくる中でいろいろな遊びの楽しさを経験することが必要ではないかと考え、幼児組の担任同士が連携をとりながら、しっぽ取りや中当て、鬼ごっこなどを好きな時に楽しめるよう環境構成や援助を行っている。今回は、しっぽ取りの遊びの中で5歳児が「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」につながるどのような経験をしているのかを探り、必要な援助や環境構成を職員間で共有しながら、園全体で実践していきたい。

### 2. 研究事例

しっぽ取りの場面 10月27日（火）5歳児ぞう組（男児2名 女児2名 計4名）

①5歳児4人が交代でライン引きを使い、ところどころグニャッと曲がった大きな線（楕円形）を引いた。すずらんテープを編んだ40センチぐらいの長さのしっぽを身に付けて、5歳児（ぞう組）対4歳児（くま組）、男児対女児に分かれてしっぽ取りを繰り返していた。②しっぽはズボンに深く入れて見えにくくしたり、相手が近づいてくるとしっぽの先を握ったりして取られないようにしていた。

5歳児対4歳児のゲームで、しっぽを取られたA子はテラスに座っていたが、③B男が勝ち残っているのに気が付くと、立ち上がり「B男頑張れB男頑張れ」と手を叩きながら、B男がしっぽを取られるまでの間大きな声で応援していた。5歳児対4歳児のゲームは2回ほど行った。

保育教諭2名も女児の組に参加し、男児対女児のゲームが始まった。④C子はラインの近くにいた4歳児のしっぽをねらっていたところに、ちょうど保育教諭が走ってきたので、C子「先生、はさみうちして」と叫んだ。C子は保育教諭と向かい合せに立ち、両手を広げて相手の動きを見ながら左右に動き、逃げ道をふさごうとしたが逃げられた。

勝敗が決まると、⑤5歳児4人が集まりグループ分けをどうするか相談して決めた後、B男がみんなを中央に集め、次のグループ分けを説明していた。B男「今度は先生対ぞう組くま組でやります」と伝え、B男の合図でゲームが始まった。⑥C子はこっそり保育教諭の背後に回り、しっぽを取ろうとした。B男は取られそうになって素早く身を交わして逃げたり、ラインぎりぎりのところをしっぽが円の外側になる体勢で逃げたりした。

数十分経ってもなかなか勝負がつかず、★しっぽを取られた4歳児がテラスの応援席に行かずに、次々に新しいしっぽを付け直して、にこにこしながら再びゲームに参加していた。保育者はB男が走っているところに近づき、「しっぽ取られても応援席に行かずに、またしっぽ付けてやっている友達がいるね。もう一回みんなにルールを話したらいいね」と言うと、B男「分かった」と答えた。⑦B男は中央に走って行き、少し大きな声で「みんな集まって」と呼び掛けた。みんなが集まると、B男「しっぽ取られたらあっちの応援席に行って応援するがで」と伝え、周りの子ども達はうなずいて再びゲームが始まった。

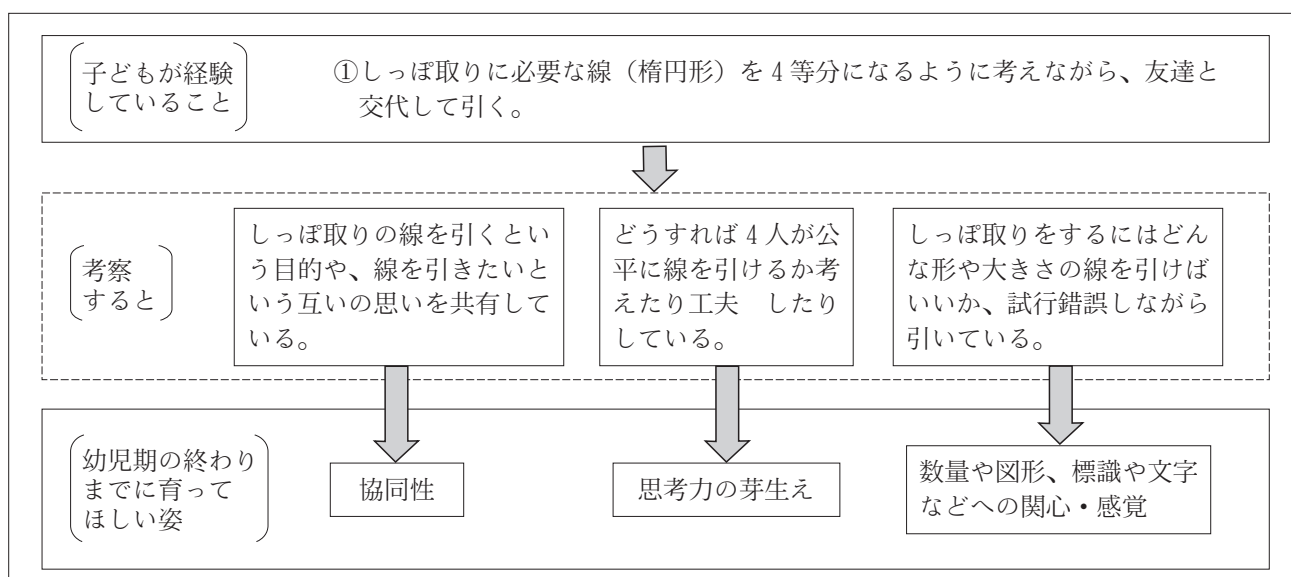


### 3. 研究内容

○事例の遊びの中で子どもが経験していることを、5領域の内容を通して確認

健康	人間関係	環境	言葉	表現
<ul style="list-style-type: none"> <li>・いろいろな遊びの中で十分に体を動かす。</li> <li>・進んで戸外で遊ぶ。</li> <li>・様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・友達と積極的に関わりながら喜びや悲しみを共感し合う。</li> <li>・友達のよさに気づき、一緒に活動する楽しさを味わう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生活の中でいろいろな物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。</li> <li>・日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりなどしたことを自分なりに言葉で表現する。</li> <li>・したいこと、してほしいことを言葉で表現したり、分からないことを尋ねたりする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。</li> </ul>

○事例下線部の子どもの姿から経験していることを読み取り「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」へ、どのようにつながるかを考察（下線部①の考察の流れを抜粋）



○下線部②～⑦も上記のように考察

子どもが経験していること	「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」
②相手がしっぽを取りづらい付け方や方法を自分で考えて実際に試している。	健康な心と体 自立心 思考力の芽生え
③友達が頑張っている姿を見て嬉しい気持ちになる。また、応援したい思いを体中で表現している。	協同性 豊かな感性と表現
④保育教諭や友達と一緒に工夫したり方法を考えたり、協力してやってみたりすることが楽しい。	協同性 思考力の芽生え 言葉による伝え合い
⑤年長児で話し合い、決まったことを年下の友達にはっきり伝えている。	協同性 言葉による伝え合い
⑥相手に気付かれないしっぽの取り方や相手の動きに対応した動き方や方法を体験習得している。	健康な心と体 自立心 思考力の芽生え
⑦ルールが守れずにゲームが進んでいることを知り、正しいルールを友達に伝えている。	協同性 規範意識の芽生え 言葉による伝え合い

○これから必要と思われる環境構成や援助

事例の★下線部より

- ゲームの途中から、しっぽを取られても座らずに、またしっぽを付けてゲームに参加している4歳児の姿があったが、5歳児はルールを守ることより自分のしっぽの取り合いに意識が向いて、保育教諭の言葉掛けがあるまでは何も言わず、ゲームが続いていた。これから遊び込んでいく中で、5歳児なりに課題解決をしていく力を身に付けていくために「どうしてなかなか勝負がつかないんだろうね」「どうすればいいんだろうね」など、問題に気付いて自分で考えてみようと思えるような言葉掛けや援助が必要ではないか。

5歳児の今までの姿より

- 5歳児は運動遊びやルールのある遊びを楽しんだ経験が少なく、保育教諭が遊びを投げ掛けても、その遊びの楽しさを感じる前にすぐにやめなくなったり、遊び込んで楽しさを分かっているいつもの遊びに気持ちが向いたりする現状がある。人数が少なく4歳児と一緒に遊ぶ際に、しっぽ取りは子ども達とルールをつくりやすく分かりやすい、またしっぽがあることで、それを取り合う楽しさの中で体を動かすことができると考えた。保育教諭は、スリル感や充実感など、その遊びの中で子どもが楽しいと感じる要素をしっかり捉え、保育教諭も真剣にしっぽを取りにいく、逆にあえて取られやすくしてみるといったアイデアを実践するなど、子ども自身が「楽しいからまたやりたい」「負けて悔しい」「何度でも挑戦したい」と思えるような環境構成や援助が必要と思われる。

#### 4. まとめと今後の課題

- しっぽ取りの姿を5領域の内容を通して捉え、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」とのつながりを考察することで、5歳児が今まで楽しんでいた遊びとは異なるいろいろな経験を、この遊びの中で重ねていることが確認できた。また、4歳児と一緒にルールのある遊びを経験することで、互いに楽しさやつながりを感じるようになっているが、保育教諭はただ一緒に遊びを楽しめばよいとするのではなく、4歳児と5歳児とは同じ遊びでもねらいが異なってくることを意識しなければならない。保育教諭が5歳児としてこういう経験をしてほしいという明確なねらいをもち、意図的な環境構成や言葉掛けなどを行うことによって、子どもは楽しさだけでなく疑問や悔しさなどの経験を重ね、それを自分達で解決していくことが満足感や達成感につながっていくと考える。
- 年齢に応じたねらいや、必要な援助や環境構成を考える中で、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に向けて、5歳児だけでなく0歳児から5歳児までのそれぞれが、その年齢に必要な経験をしていけるようにすることが大切だと再認識した。この認識を職員間で共有し、これからも5領域を通して「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」につながる育ちを各年齢で保障できるような環境構成や援助を職員が連携し、園全体で積み重ねていきたいと考える。

## 高岡支部

### ○研究の進め方

- ・各園にて研究保育を行い、協議した内容をまとめることとした。どの年齢を取り上げるかは各園で決めて取り組んだ。
- ・今年度、支部の研究として公開保育園になっていた栲原こども園においては、園内だけでなく多くの目で見たいという園の思いもあり、研究員も参加して研究保育を行った。まとめは栲原こども園内で行うようにした。

### ○各園の研究で学んだこと

- ・ビデオを活用した園が多く、複数の目で子どもの姿を細かいところも見返したり同じ場面を見たりしていくことで、自分とは違う見方や捉え方があることにも気付くことができた。また、多面的に捉えいろいろな意見を出し合い、協議を深めていくことができたのではないかと思う。
- ・一つの遊びの中でも同じことを楽しんでいることもあれば、一人一人違うことを楽しんでいることもあるということが分かったので、子どもが何に興味をもっているのか、何を感じているのかなどを捉え続けていくことの必要性を改めて感じた。その中で、子どもの経験していることや育とうとしている力を考え、援助していくことの大切さも学んだ。
- ・保育者が生活や遊びの中で子どもに経験させたいことを考えながら環境構成や援助をしていくこと、また、その時期の子ども達にその遊びや活動、やり方が合っているのか、他に経験できる遊びはないのかなど、子どもの姿から振り返っていくことを繰り返していくことの大切さを学んだ。そして、それらを実現していくためには、各園における教材研究の必要性も感じた。

### ○成果と課題

- ・今年度は各園で研究保育を行い、一つの場面から子どもの姿を通してどんな経験をしているのか、どんな力が育とうとしているのかということを探ってきた。協議を重ね、いろいろな意見を出し合いながら進めていくことで、その子どもの育ちや各年齢の遊びや活動の意味などを改めて考え直すことができたと思う。そのための環境構成や保育者の援助に何が必要か、何を大切にしたいかということの共通理解にもつながっていったのではないだろうか。研究の取り組み方やまとめ方などにも、各園における工夫と違いがあり、今後の研究のまとめ方についても活かしていけると思われる。
- ・各園において、子どもの姿から内面（楽しんでいること、経験していることなど）を読み取ろうとしたり、その姿が5領域や10の姿のどこにつながっていくかということを考えたりする意識は広がってきていると思う。しかし、10の姿へのつながりを考えることが終着点になっているようにも感じている。そのため、今後は10の姿を意識するあまり安易に当てはめていないか、本当にそれで合っているのかということ、子どもの姿に立ち返りながら協議を深めていくことが大切になってくると考える。10の姿は、事例の中にあられる姿だけではなく、日頃の姿やそれまでの経験などからもつながってくると思うので、そういった背景も含めながら読み取っていけるようにしたい。

## 高岡支部 越知町立越知幼稚園

研究主題 「5領域を通して育まれる幼児期の終わりまでに育ってほしい姿につながる保育のあり方（幼児理解をもとにして探る）」

### 1. 研究にあたって

昨年度の研究では、子ども達が何を楽しんでいるのかを考察し、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿へのつながりも考えながら、ねらいの振り返りを行い、子どもの今の育ちを捉えることや今後大切にしていきたいことを考え、援助していくことの大切さを再確認した。

そして本年度、本園の子ども姿を話し合う中で、興味のあることには自分から進んでやろうとするが、苦手だということには自ら関わろうとする姿が見られない実態が見えてきた。そこで「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を見通し、必要な経験から子どもが主体的に関わることができる環境やそのための教師の関わりについて考えていくことにした。

### 2. 研究の進め方

- 4歳児クラスのA男の遊びの写真やビデオの記録を通して、主題に基づき教師の関わりや環境の構成についてKJ法で協議する。
- 協議を通して得られた教師の気づきについてまとめる。

### 3. 研究事例

〈前日までのA男の姿〉

- ・体を動かすことが好きで年長児のドッチボールやサッカーには、自分から「入れて」と積極的に遊びに加わる姿がある。
- ・描いたり切ったりする製作は、自信がなく自分から進んでやろうとすることは少ないが、段ボールカッターを使って切ることができるようになり、折り目にそって切ることを繰り返していた。切った物を使って何かを作ることはなく、切った物は元の段ボール入れに戻していた。
- ・前日、女兒3名は、どんぐりをボンドで画用紙や段ボールに貼ってケーキに見立てたり、イチョウの葉を何枚も重ねて花を作ったりしていた。A男はその場にはいるが一緒に作ることはなかった。教師が「段ボール切ってみる？」と誘うと段ボールを折り目にそって切りながら、「カッターをこうしたら切れるね」と言い、手を動かして見せた。

製作活動を通して自分で作る楽しさや表現する楽しさも味わってほしいと思い、A男の事例を通して環境構成や援助を考えていくことにした。

<事例> 1

C子が前日に作ったケーキを持ってきて「先生ケーキ売りたい」と教師に言った。教師が「1個しかないき、ケーキ屋さんやったらもっとあったらいいかもね」と言うとC子は段ボールに三角を描き始めた。それを見てA男も真似をして三角を描き切ろうとしたが、切れなかったので「できん」と言ってやめた。今度は①自分で線を引いて細長い形に切り始めた。A男が「切れた！」と笑顔で言い、その後も線を描いて細長い形を4枚切ると、切った段ボールを持って友達の所に行き「誰かいらん？」と聞いた。B子が「いる」と言ったので、4枚全部渡した。②B子が「ありがとう」と言うとA男は笑った。それを見ていたD子が「A男君私も欲しい、欲しい、いる、切って」と言うと、A男はすぐにまた段ボールを切り、D子に渡した。

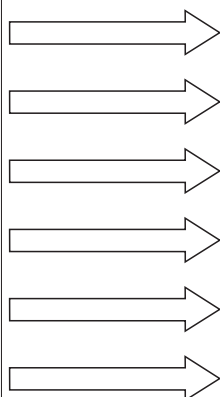
教師が四角に切った段ボールをボンドでいくつも繋げていると、A男とC子が「何それ、作りたい」と言い、段ボールを切り始めた。③A男は段ボールを細長く切り、それを何度も切って四角を作り、自分なりに重ねて貼っていた。それを見た教師が「階段みたいやね」と言うと、何枚重ねたか数えながら切って貼ることを繰り返していた。周りにいた子ども達はテレビや机を作り始めた。D子が「小さいお家作ろう」と言ったので④教師が段ボールを置くと、それぞれが自分の作った物を並べた。C子が「ほかにお家にある物ないかな？そうだと、車にする、車作ろう」と言い、タイヤを作って段ボール箱に貼って車を作ろうとしていた。そこにA男が「ハンドル作っちゃお」と言いながら、ハンドルを作った。

経験していることの読み取り  
(○5領域 ◇10の姿)

<<研究協議より>>

<子どもの姿> A男

- ・友達のしていることに興味をもち、見て真似たり、考えたり、今までに経験したことを繰り返したりしていた。
- ・自分なりにやってみて、できると喜んだ。
- ・友達にありがとうと言われて笑った。
- ・自分の切った段ボールを「誰かいらん？」と聞いて全部渡した。
- ・友達に「誰かいらん？」「ハンドル作っちゃお」などと自分の思いを言葉で伝えようとした。



- ・友達のしていることに興味をもち、自分からやってみようとする。  
○環境 ◇自立心
- ・前日の折れ線に添って切れた経験をふまえ、自分で考えたり工夫したり試したりしてやろうとする。  
○表現 ◇思考力の芽生え
- ・自分なりのやり方でできたことが嬉しい。  
○健康 ◇自立心 思考力の芽生え
- ・友達に受け入れてもらえたことが嬉しいと感じる。  
○人間関係 ◇社会生活との関わり
- ・自分でできることを友達に言葉で伝えたい。  
○人間関係、言葉  
◇社会生活との関わり 豊かな感性と表現 言葉による伝え合い

<<協議後の考察>>

下線部①より、前日の体験から、三角は難しいが細長い形なら切れるのではないかと思ったのではないだろうか。  
下線部②より、友達に「ありがとう」と受け入れられたことで、遊びの仲間になった気分を感じたのではないだろうか。

下線部③より、教師が作っている物を見て、自分にもできると思えたことから自分からやってみる姿に繋がったのではないだろうか。

下線部④より、教師が段ボールを用意したことで、友達と同じイメージをもつことができたのではないだろうか。

《協議後の気付き》

- ・ 4歳児は見たことで興味や遊びが変わっていくので、“やってみたい”と思えるような教材を考えたり、友達が見ていることが見える位置、一緒にできるような机などの配置、広さを考えて遊びの場を作ったり、また子どもの姿に応じて環境を再構成することが必要だということがわかった。
- ・ 教師は、一人一人が自分なりにやろうとしている姿を受け止め、認める声掛けをして、見守ったりどうしたらいいのかを一緒に考えたりして、安心して自分を表現できるようにすることが大切だと再認識した。また、一人一人を認めることで、周りの子ども達が友達の優しさや得意なことに気付けるようにしていきたい。
- ・ A男は作って遊ぶことにあまり興味をもっていなかったが、友達と関わることで自分から作ってみようとするようになった。一人一人が色々なことに興味をもち自分からやってみようという気持ちもてるように、教師も同じ場で遊ぶ中で、やり取りをしながら遊ぶ楽しさや、一人ではできなかったことが友達と一緒にならできたことを具体的に言葉にして、友達と一緒に遊ぶ楽しさを感じられるような援助を考えていきたい。



段ボールを小さく切っている



A男が段ボールで作った物



家作り

#### 4. まとめ

- ・ 一つの場面を見て、A男が楽しんでいることや経験していることは何かを話し合う中で、自分とは違う見方や捉え方があることに気付くことができた。自分だけの主観で見るのではなく、子どもの姿から思いを理解することが重要だということを再確認した。日々の保育を一つ一つ丁寧に振り返りながら、子どもの内面を探っていきたい。
- ・ 一人一人の発達の課題を踏まえた教材を選び、経験させたい時期や言葉をかけるタイミングなども考え、教師自身も作ることを楽しみながら子ども達に楽しさや方法を伝えていくことが大切であることを再確認することができた。
- ・ 教師は、子どもが何に興味をもっているのか、何を感じているのかなどを捉え続けていくことが必要である。また、子どもの発達は、生活経験や興味・関心などによって一人一人違っているため、子どもの姿から今経験していることは何なのか、また今必要な経験は何なのかを考え、環境構成や援助を重ねていくことが大切であるということを再確認することができた。
- ・ 教師は、子どもの表情やしぐさといった言葉にならないサインを感じ取り、見通しがもてるように共に考えたり、励ましたりしながら子どもの心に寄り添い、関わっていくことが興味や関心をもちやってみたくなるきっかけ作りになっていくのではないだろうか。
- ・ 子どものよさを伸ばし、偏りも含めた個々の育ちを基に、子どもに経験させたい遊びが5領域のどこにつながるのかを考えながら、教師の意図をもったかかわりや環境の構成を今後も探っていきたい。

## 高岡支部 津野町立幼保連携型認定こども園にじいろ園

研究主題 「5領域を通して育まれる幼児期の終わりまでに育ってほしい姿につながる保育のあり方（幼児理解をもとにして探る）」

### 1. 研究にあたって

昨年度の高岡支部の研究では子どもの育ちを細かく捉え、今後どんなところが育ってほしいのか、そのために必要な環境構成や援助を考えることが大切だと学んだ。また、園内の研究では子どもの姿から各年齢の発達を捉え、幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿（以下「10の姿」という）へのつながりを考えた。しかし、各年齢の育ちは捉えたが、次の年齢へつなげるための環境構成や援助には課題が残った。そこで今年度は「0歳児～5歳児までの発達を考える（5領域を通して）」を研究の視点として取り組み、各年齢の発達をおさえ次の年齢へつなげていくための環境構成や援助について考えたい。

### 2. 研究の進め方

- 各クラスが行っている研究保育のうち、今回は4歳児の研究保育から以下の4つの視点に沿ってKJ法を用いて協議を行う。
  - ①子どもがどんなことに興味をもって関わり、どのように遊んでいたか。
  - ②どんなところに楽しさを感じていたのか、どんな経験をしていたのか。また5領域のどの部分につながっているのか。
  - ③①②の姿が見られたのはどんな環境構成と援助があったからか。
  - ④明日の保育につなげるためにプラスしたい環境構成と援助から、10の姿へつなげるための環境構成や援助を考える。
- ビデオを見ながら検証し、内面の読み取りを深めていく。

### 3. 研究事例

○4歳児研究保育 11月27日（金） 4歳児きりん組（男児6名・女児11名 計17名）

本日のねらい（○）と内容（△）（抜粋）

○先生や友達と一緒に体を動かしたり、簡単なルールのある遊びを楽しむ。

△友達を追いかけたり逃げたりして、しっぽとりをして遊ぶ。

#### 【事例1】～しっぽとりの場面から考える～

青チーム・白チーム（クラスの帽子の色）に分かれてしっぽとりをする。しっぽは多めに用意されていて、繰り返し遊べるようになっている。また、線の外には出ない、転んだときはしっぽは取らないなど簡単なルールもある。両チームには陣地があり、しっぽをつけたり逃げ込んだりする時に使っている。

外に出ると、しっぽとりをしたい子ども達（9人）が、前日にしっぽとりをしていた場所に集まり準備を始めていた。

「よーい、スタート！」というA男の声でしっぽとりが始まり、陣地から勢いよく走り出したり、慎重に走り出す姿が見られた。



① しっぽを取られないように走って友達から離れようとする子もいれば、おしりを突き出したまま相手のしっぽを取ろうとしたりする子、白線の内側を大きく走っては陣地に戻ることを繰り返す子もいた。なかには相手の動きをよく見ながらしっぽを狙ったり、取られないように体をひねって逃げたりする姿もあったが、② なかなか相手のしっぽが取れなかったり、自分のしっぽが取られそうになったりすると怒ってその場に座りこんだり離れていったりする子もいた。「○○くんの取った～」と笑顔で伝えた子に対して担任は「すごいね～」と返事を返した。

③ B子が白チームの最後の一人になり、青チームの子ども達が一斉に追いかけた。B子のしっぽはすぐに取られてしまい、B子は腰に手をあてて取られたことを確認していた。すると友達が「しっぽ取られちゃうで」とB子に言った。B子は「知っちゃう」と泣きながら先生の所に行った。

～中略～

④ しっぽとりに参加していなかった子ども達は、赤土山で砂を集めたり（1名）、砂場でごちそうを作ったり（4名）、ブランコをしたり（3名）して遊んでいた。

【子どもの姿からつながる  
5領域を考える】

○下線①の姿は…

**健康** ねらい(2)・内容(2)の園児が活動に興味や関心をもち、自らが心を弾ませて取り組んでいる時には体も弾むように動き、生き生きとした姿につながる。

○下線②の姿は…

**人間関係** ねらい(1)・内容(4)の園児は、興味や目当てをもって遊びを始めても、途中でうまくいかなかったり、やり続ける気持ちがなくなって止めてしまったりすることがある。このようなとき、園児は信頼する保育教諭に温かく見守られ、支えられていると感じ、必要に応じて適切な援助を受けることができれば、諦めずにやり遂げる姿につながる。

【担任の思い】

- ・しっぽとりを始めたばかりの頃は、チームは作らずに個人戦で遊んでいたが、あまり盛り上がらなくなってきたため、より楽しめるようにとチームに分かれて遊ぶことを提案した。
- ・担任のこれまでの経験から、個人戦の次はチーム戦、チームに分かれる＝人数を合わせるという意識があった。

【○下線①②③④について】

【子どもが経験していたこと】

- ・友達と一緒に遊ぶこと。
- ・思い切り走ること。
- ・逃げるのが上手な友達のしっぽを取ること。
- ・友達に追いかけるスリル。
- ・しっぽを取られないように体をひねり、相手を避けるように逃げること。
- ・友達の動きをよく見て、しっぽをねらって取ること。

【考察】

- ・下線①の姿から、自分のしっぽを守りながら相手のしっぽを狙う子もいたが、ほとんどの子は自分のしっぽをあまり気にせずにしっぽを取るだけや逃げるだけ楽しかったり、追いかけてもらうことが楽しかったりするのではないか。
- ・しっぽを守りながら相手のしっぽを狙うことがまだ難しい子が多いため、自分の思い通りにできずに怒ったり泣いたりする子がいるのではないか。
- ・下線③の姿から、最後の一人になり相手チームの子に一斉に追いかけることに緊張感や追いつめられた気





持ちを感じたり、取られた悔しさを感じたりしていたのではないか。

- ・下線④の姿から、参観者がしっぽりに参加していない子に「しっぽりせんが？」と尋ねると、「みんながぼくばかり追いかけてくるもん」と言っていた。担任は個人戦でしっぽりをしていたのを、更にゲームが盛り上がるのではないかという思いでチーム分けをしたが、チーム分けをすることで最後に残った子が一齐に追いかけられる状況が多くなり、追いかけられたり狙われたりすることが苦手な子はしっぽりに入りにくくなったのではないかと考えた。

【明日の保育につなげるためにプラスしたい環境構成と援助】つながる10の姿

- ・4歳児にとって自分のしっぽを取られないように意識しながら、友達のしっぽを取るの難しいのではないかと考えた。しっぽをつけて逃げるチーム、しっぽを取るチームに分かれてしっぽりをしてみたらどうか。

健康な心と体

- ・繰り返し遊ぶ中で子どもの気付き（チーム分けや人数、ルール、場の広さなど）を受け止めて言葉にして返したり、子どもの考えを周囲の子どもに知らせながら少しずつ子どもと一緒に考えたりする。

思考力の芽生え 共同性

- ・4歳児の今の時期に集団で遊ぶ経験をするには必要な経験だと思うので、しっぽりに入っていない子がどうして入らないのかを探る。

#### 4. まとめ

しっぽりを通して、子ども達は体を動かして遊ぶことや友達や保育者と一緒に遊ぶことを楽しんでいて、しっぽを取ったり取るために走ったりすることや取られないように逃げることなど、思いや経験していることは一人一人違っていることが分かった。

保育者の思いからしっぽりをチームに分かれて遊ぶ方法を提案したことで、しっぽりがより楽しくなった子もいる反面、今回の研究保育当日にはしっぽりに1度も参加しなかった子ども達もいた。4歳児にとって集団で遊ぶ経験は、5歳児での自分達で遊びや生活をすすめることや、友達と同じ目的をもって遊ぶこと、友達と思いや考えを出し合って遊ぶことなどにつながり、発達に必要な経験だと考える。しっぽりをクラス全体の活動として行い、皆が楽しむためには保育者が固定概念にとらわれず、その時々で見られる子どもの姿を通して発達や思いを捉え、遊びを進めていくことが大切だと感じた。そのためには保育者は遊びの中で、今、子どもにどんな経験が必要なのかを十分に考え、4歳児としての遊びの方法を工夫していくことが必要ではないだろうか。また、4歳児にとって必要な経験をクラス全員ができるように、園としてどんなことを経験させていくのかを話し合っって年齢に合った遊び方を探ったり、保育者の経験によって子どもの活動に差が生まれないう、職員間で共有することも必要だと考える。

研究を通して、子ども達一人一人が何を楽しんでいて、どんな思いをもっているのかを細かく捉えることが重要であると再認識したが、課題の一つでもある。子どもたちが必要な経験をしていけるように子ども一人一人の姿を細かく捉え、遊びの方法や環境を工夫したり5歳児を見据えた関わりをしていきたい。また、一つの遊びにこだわらず、いろいろな遊びの中で必要な経験をしていけるように教材研究をしたり、職員間でいろいろな教材の共有をしていきたい。

## 高岡支部 津野町立幼保連携型認定こども園さくらんぼ園

研究主題 「5領域を通して育まれる幼児期の終わりまでに育ってほしい姿につながる保育のあり方（幼児理解をもとにして探る）」

### 1. 研究にあたって

昨年度は各年齢での発達をどのように捉え「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」につなげていくために必要な経験や援助はどうあるべきか研究を進めてきた。目の前の子どもの育ちを捉えることへの課題は続いている。そこで長期の指導計画にも位置付けている“神楽ごっこ”を取り上げ、子ども達の育ちにどのような意味をもっているのか具体的な姿を通して多面的に捉え、今後育ってほしいところや、そのために必要な環境構成や援助について探りたいと考えた。

### 2. 研究の進め方

- 5歳児の研究保育を行い、KJ法を用いて子ども達の具体的な姿や経験していた（楽しんでいた）ことなどについて協議を進めていく。
- 協議で出た内容をビデオを見ながら検証し、子ども達の内面の読み取りを深める。

### 3. 研究事例

研究保育 11月26日（木） 5歳児ぞう組（男児5名、女児7名 計12名）

【事例】神楽ごっこの場面より 『<sup>あくまばら</sup>悪魔祓い』

A子とB子が「悪魔祓いしよう」と話しているとC子も「Cもやる」と言い、太鼓の“ド・ドン”という音で3人の舞が始まった。3人とも手首をひねって剣を動かしたり、片足をドンと踏み鳴らして動き始めたり、時々回転を入れたりして、前後左右に移動しながら舞をしていた。①A子が動いたり移動し始めたりすると、②B子はA子の動きを見てワテンボズれながらも同じように動き、交差して対になるところではA子の移動に合わせて反対側に動くなどしていた。③C子がA子とB子の間にいたり、動きが遅れていたりする時には、A子がC子に動く方向や立ち位置などを手に持っている剣で手招きや指差しをするように示し教え、C子もそれに合わせて動いていた。④A子は自分から動き始めるが、B子とC子の動きを見たり待ったりしながら“うんうん”とうなずき、次の動きをしていた。次第に3人の動くタイミングのずれも短くなり、交差したり輪になって同じ方向に動いたりしながら、互いに顔を見合わせ微笑む姿も見られた。

※『悪魔祓い』とは、津野町の伝統文化“津野山古式神楽”の中にある演目の一つ。舞手が4人いる。

《『悪魔祓い』をしている時のD男の姿》

D男は広告紙で作った鉄砲を参観に来た保育者に見せたり、使い方を教えたりしていた。悪魔祓の舞が終わりを迎える頃、後ろを振り返り⑤神楽ごっこの様子を見ると、3人の動きにぶつからないように小道具を入れたカゴまで小走りで移動した。最初に画用紙で作った⑥扇子を手にとったが、また戻し、道具をかき分け何かを探していた。先に取った扇子と似たような扇子を見つけると⑦「こんなんでもやりよったで」と言いA子に扇子を差し出した。A子は気付いて扇子に目を向けたが、受け取ることはなく舞い続けていた。そこでD男はB子の方に近づきながら「こんなんでもやりよったき、やってもいいで」と扇子を前に出したが、B子は気付かずに通り過ぎた。差し出したままいるも誰も受け取らなかったで、近くにあった机の上に置きその場を去ると、また別の参観保育者に自分の鉄砲を見せていた。

◎研究協議より

子どもの姿

- B子はA子を、C子は2人を見て動き、3人で目を合わせて動きやタイミングを合わせようとしていた。

経験の読み取り

- 表現をする楽しさ
- 友達と一緒に息を合わせて舞う楽しさ
- 同じイメージをもちながら合わせようとする

豊かな感性と表現  
協同性

◎3人とも同じ楽しさや経験だったのか。3人の姿から内面を読み取る。(ここでは2人を取り上げる)

A子

- 下線①より、動いたり、場所を移動したりなどの起点は終始A子だった。A子の中では舞の流れや動きのイメージができており、それを再現することが楽しかったのではないかと推察される。→豊かな感性と表現
- 下線③④より、(C子に立ち位置を教えたり、2人の動きを見て待ったりしては次の動きをしていたことから)自分のイメージで舞いながらも“3人で舞う”という意識があり、動きを合わせたいという思いや“こう動いてほしい”という思いがあったのではないかと推察される。→自立心、協同性、豊かな感性と表現

自分の思い描く神楽を表現するためには友達の存在や力を合わせることの必要性に気付き、そのための動き方や伝え方をA子なりに感じとったり考えたりしている。自分の思いだけでなく、友達と一緒に進めていくためのA子なりのリーダーシップ性も育ててきているのではないかと推察される。

B子 <日頃のB子の姿> 舞役は誰かと一緒にする演目だけする。また、クラスで地域の神祭の神楽を見に行っていたが、B子は休んでおり『悪魔祓い』の演目は見ていない。

- 下線②より、A子の動きや言葉がB子にとっての悪魔祓いのイメージになっていると思われる。悪魔祓いの一つ一つの動きのイメージはもつようになったと思うが、自分から動き始めることはない様子から舞全体の流れのイメージはないように思う。A子の動きに合わせてたり、同じように動いたりすることがB子にとっての“本物のように舞う”ということなのではないだろうか。また友達と一緒にすることで安心して表現でき、楽しく舞をすることができたのではないかと推察される。→協同性、思考力の芽生え、豊かな感性と表現

A子と一緒にすることで自信をもってできたり、達成感を味わっている。友達がしていることを受け入れ認め、一緒にやりながら取り入れていくことで自分の力へと変えていく力をもっていると考えられる。日頃から自分の知っていることを友達に教えたり、周りのことにもよく気が付くB子なので、自信をもって取り組む経験を積み重ねていくことで、次はB子が友達に教えたり中心になってする力も育っていくのではないかと推察される。

◎別の遊びから関わってきたD男の内面を探る。

- 下線⑤より、D男は違うことをしていたが、神楽ごっこの様子(雰囲気)は感じとりながら遊んでいたのではないかと推察される。そのため、3人の舞の動きを邪魔しないようにと移動する行動へとつながったのではないかと推察される。
- 下線⑥より、探していた扇子は自分が作ったものだった。どの扇子でもよかったわけではなく、自分が作ったものを友達に使ってもらいたいという思いもあったのではないかと推察される。
- 下線⑦より、神楽のいろいろな演目の中で扇子を使う舞をよく見てきたことから、“扇子=神楽で使うもの”というイメージがあり、使っていたことを知らせたり“これも持ったらいいと思うで”と勧めたりしたのかもしれない。しかし、A子にとっては必要ないものだったため受け取ってもらえなかったのだと思う。

D男なりの協同性、社会生活との関わり

今は友達の行動に自分なりの思いを寄せようとしている段階ではないだろうか。周りの子は神楽全体をイメージして合わせていこうとする中、D男の捉えはまだ断片的であるように思う。そのため、周りの友達とD男のしていることが大きくズレているように見えるのかもしれない。考えたり思ったりしたことをすぐ行動に移す力を持っていると思うので、周りの友達の様子や思いを感じ取れるようになってくると、友達と一緒に同じ目的に向かって活動することも増えてくるのではないかと考える。

◎次に求められる環境構成や援助を考える。

環境構成

- ・舞や楽など“する側”“見る側”で参加できるよう、お客様席をつくと、友達がしているのを見て「次は自分がする」という気持ちにもなりやすく、互いの神楽を見合う場にもなるのではないだろうか。また、異年齢児など、いろいろな人に見てもらうことで、より神楽が楽しくなり自信をもつことにもつながっていくと考えられる。年中以下の園児にとっては“自分達もやってみたい”と真似をしたり、憧れの気持ちをもつようになり、本園の神楽遊びが次の年へと受け継がれていく場にもなると考えられる。

保育者の援助

- ・D男のように神楽ごっこに直接関わってなくても、友達がしているのを感じとり、自分が気付いたり考えたりしたタイミングで関わっていくこともある。そのため、他の子どもにとってはD男の行動が突拍子もないものだったり不必要に感じたりすることもあるかもしれないが、まずはD男が舞をしている子に扇子を渡そうとした思いを受け止め、「神楽には扇子が必要だね」と認めたい。そして周りの子どもが今していることや思っていることも伝えていくことで、D男も神楽の一員としての仲間意識をつくっていくと考えられる。

#### 4. まとめ

神楽ごっこを通して、楽しんでいることは個々に違いがあっても友達と一緒にやる楽しさを感じたり、友達のよさを感じ合いながらみんなでつくり上げていこうとしたりする気持ちの育ちが見てとれた。また、地域の伝統文化である神楽にふれる中で、自分達なりの神楽をかたちにしていき、それを表現することの楽しさを十分に感じていると思った。個々の育ちが全体の活動の中で活かされていく5歳児のこの時期に、幼児期の終わりまでに育てほしい姿につながるためのいい教材であることも職員間で共有できた。地域の伝統を大切に育ちにもつながるので、園の特色として大事にするのと同時に、5歳児だけでなく他年齢児にも神楽への気持ちが浸透していく活動にしていきたい。

保育者が子どもから出る意見を大事にしながら時には気付かせる声を投げかけ、互いの姿や思いを見聞きし合う場をつくることで友達のよさを感じ認め合えるようになってきた。その積み重ねが子ども同士でイメージを合わせ、自分達で遊びを進めようとする姿につながってきたのだと思う。しかし、互いの雰囲気を感じながら進めてはいるが、細かいところのイメージの共有はまだできていないことも多かった。互いのイメージを確認し、友達の思いと自分の思いをすり合わせながら共通のイメージがもてるような援助をすることの必要性も学んだ。遊びや活動を通して、保育者が子ども達に“こうなってほしい”“こんな力を育てたい”という思いに見通しをもち、段階をふんだ援助をしていくことで必要な経験を積み重ねていけるようにすることが大切だと感じた。

今年度の研究保育では、KJ法による協議で出たことをビデオで見直し検証していく中で新たな気付きや意見を出し合い、事例の一場面を切り取り細かく見ることで、より多面的に捉えながら協議を深めていくことができたと思う。複数の目で保育を見ても、個々によって見る視点や場面、強く印象に残ったものが違うため、同じ場面を見て姿を捉えていくという点ではビデオの活用がとても有効であったと思われる。今後は他の遊びの姿からも育てたい姿を保育者が意識して子どもの姿を読み取っていきける力をつけていくことを課題とし、研究に取り組んでいきたい。

## 高岡支部 梶原町立幼保連携型認定こども園梶原こども園

研究主題 「5領域を通して育まれる幼児期の終わりまでに育ってほしい姿につながる保育のあり方（幼児理解をもとにして探る）」

### 1. 研究にあたって

進級児21名の4歳児クラスでは、気の合う友達の側で遊ぶことを楽しむ姿がみられる一方、自分の思いを通そうとして、相手の言葉に怒ったり泣いたりしていざこざになり、周りの友達も参加して言い合うために、保育者が話を聞いて、互いの思いを出し考え合う場をつくるのが不十分だった。

こうした子ども達への保育者の援助や環境構成のあり方を考えながら園全体で研究を進め、4歳児が今、何を楽しんだり、経験したりしているのかを捉えていきたいと考えた。

### 2. 研究の進め方

- ① 4歳児が好きな遊びを通して経験し、楽しんでいることは何かを考え、個々の内面理解に基づき課題やその背景などを考える。
- ② ①を基本に進めてきた保育を事前研修で見て話し合い、環境や援助を考える。
- ③ 研究保育ではKJ法を使って、それぞれの子ども達はどのようなことを楽しんでいるのかを探り、育っていることは何かを明確にして、次の保育につなげていく。



### 3. 研究事例 第一回研究保育 7月15日（水）

4歳児 きりん組（男児10名、女児11名 計21名）

きりん組のねらい（◎）内容（△）（抜粋）

◎友達や先生と一緒に、自分のイメージで作ったり、作った物で繰り返し遊んだりする事を楽しむ。

△自分の思いを伝えながら、先生と魚釣りやハンバーガーやさんで使うものを作る。

△自分で作った物を使って、魚釣りやハンバーガーやさんをしたりして繰り返し遊ぶ。

保育参観・協議の視点

- ◆ 1、どんなことに興味を持って関わり、どのように楽しんでいるか（言葉、誰とどのような関わりがあったか、ものの扱い方、繰り返し、遊びの中での変化など）
- ◆ 2、その遊びを通してどんなところに楽しさを感じていると思うか（1で出した具体的な姿から、その子の思いが表れている内面を考える）
- ◆ 3、①、②の姿につながっていたと思われる、よかった環境構成と援助
- ◆ 4、明日の保育につなげるために、どのような環境構成と援助がプラスされるとよいか

魚釣りの場面（動画を通して幼児理解を図る）

保育室に、ソフト積木とブルーシートで作った海に、子ども達が画用紙で作った魚にモールの輪っかを付けて置き、チラシ、スズランテープ、モールで作った釣り竿を使って、5名の子ども達が釣っている。

① A男は、釣り竿の先の動きをじっと見つめ、口をきゅっと尖らせたりして手に持ったモールの釣り針を調節し、魚を釣り「よっしゃー」「やったー」と、釣った魚をクーラーボックスに入れることを繰り返していた。

② 足元はブルーシートの中に入れずに同じ積木に座っていた。他の友達も、積み木に座りブルーシートの中に

足を入れて釣りをしていた。

そこへ保育者が来て側で釣りを始めた。「B男君釣れゆうかね?」「A君釣れた?」保育者は側にいた子たちに「よっしゃ、先生と勝負しよう」と言い竿を垂らした。③少ししてA男は「釣れたで」と釣った魚を保育者に見せてニヤッとすると、保育者は「A君やったね、上手に釣れたね」と言った。すると、反対側で釣っていたB男が「先生、おっきいの釣れたで」と釣れた魚を嬉しそうに見せた。保育者は「お!おっきいの釣れたね、おめでとう、B君」と言った。B男が少し離れた所にあるA男と同じクーラーボックスに魚を入れると、シートの中を歩いて来たC男が、クーラーからB男の魚を取り出しシートに投げ入れ怒ったように「いかん」と言った。保育者はそれに気付かず近くで釣りを続け、他の子にも釣ったことに対して「おめでとう」と言葉をかけていた。④少ししてA男は反対側で釣っていたB男に「おっきいの釣れたで」と、にこりと見せた。

A男は、別の友達が自分の針に魚をかけようとする「いかん」と、少し嫌そうに言って自分で釣りをしたそうにした。

5分ほどして⑤普段からA男と気の合うD男が来て、A男の釣りの様子を見てニコツとして「やっちょお」とA男の釣り針に2匹の魚を引っかけた。⑥うっすらと笑みを浮かべ何も言わずその魚を釣り上げ、クーラーボックスに入れたA男。⑦A男は、クーラーボックスの中がたくさんになると、シートの海にどさっと魚を移し再び釣りを繰り返した。⑧D男はクーラーボックスから魚を出して並べて数えたりし「いっぱい釣れた」と周りの友だちや大人に話しかけた。

【研究協議】 K J法で「魚釣り」の場면을保育の視点に沿って協議した。

A男に関すること

は協議で出された意見 ★は10の姿( )は育っていること

<p>下線①釣り針を直さず釣れるかどうか試して、モールの角度を調整して、どう曲げると釣れるか釣り方を工夫して繰り返し試す経験をし、繰り返すことで、仕組みを知る遊びを経験している。</p>	<p>⇒ ★思考力の芽生え (物の性質や仕組みを感じ取る)</p>
<p>下線②足をシートの中に入れて、釣りを続けた姿や、釣れるとクーラーにすぐに入れていた姿から、これまでの魚釣りの体験から知ったこと・イメージを、つもりになって表現することを友達と楽しむ。</p>	<p>⇒ ★豊かな感性と表現 (自分なりのイメージをもって遊ぶこと)</p>
<p>下線③友達や保育者と同じ場で魚を釣ったり、釣れた喜びを伝えてやり取りをしたりすることで、人との関わりの楽しさを経験している。</p>	<p>⇒ ★協同性・言葉による伝え合い (やりとりしながら遊びを進めていく)</p>
<p>下線⑦魚を自分で選んで釣ったことを喜び、本当の釣りのようにクーラーの中に魚を入れるおもしろさを感じ、魚をためてはシートに戻し入れていたのではないか。(工夫したりして、繰り返し遊びが楽しめることで思いが実現することの面白さを感じる経験をしている)</p>	<p>⇒ ★自立心・主体的に遊びに取り組む(考えや思いを表現し自信を持って行動する)</p>
<p>下線⑥D男の「やっちょお」という言葉を、受け入れたのは、友達の中でもD男には心を許し、通じ合う関係性が出来ているのではないか。相手の気持ちに気付き遊びの中で心を通わせていく経験をしている。</p>	<p>⇒ ★社会生活との関わり (仲間とのつながり)</p>

D男に関すること

<p>下線⑧あちこちの遊びに参加しながらも「A男」と呼んで嬉しそうな顔で遊び、魚を並べて数えたり、魚を引っかけてA男に釣らせたりしている事などから、自分なりに好きな友達との遊びを楽しみながら魚を並べてみたり数を数えてみることで、数の数え方に関心をもち魚の数を確かめて、友達に見てもらい数量に親しむ遊びを経験している。</p>	<p>⇒ ★数量や図形への関心・感覚 (遊びや生活の中で、数量や図形に親しむ体験を重ねる)</p>
--	---

◎今日の保育につながった保育者の援助や環境構成について

- 友達と魚釣りの場を共有し、工夫したり試したりできる遊びがあった。海をイメージする積み木やブルーシート、釣りの道具などがあった。
- 遊びの中でうまく関われずにいる子への援助や、思いが表せず言葉にならない気持ちがあり、援助が必要な子どもに対しての関わりが出来なかった場面もあったので、自分に話しかけてくる子だけでなく子どもの表情や行動に気を配り、どれくらい遊び込めているか、一人一人の様子を見て丁寧に関わっていきながら、クラス全体を見ることが大切である。
- お互いのイメージを聞いたり伝え合ったりして、言葉を引き出せるような声かけが大切だと思われる。子どもが考えたり工夫したりしている場面で、内面を探り個々の考えや行動をありのまま受けとめ、よさを周りに知らせることで、子ども達同士の関係性も深まり、遊びへの興味も広がっていったかもしれない。

◎次に求められる環境構成や援助は

- 保育者が子どもの行動の意味をよく理解し、発した言葉や行動を考え、一人一人のよさを認めて自信につながるようにする。
- 気の合う友達の行動は受け入れるが、友達によってはそうでない時もあるので、今の年齢の育ちを考え、〇〇くんと一緒の場が楽しいと思う気持ちを理解し、個々の思いが伝わるように対応をする。
- 釣りの場面で「上手に釣れたね」「いっぱい釣れたね」「おめでとう」と声をかけていたが、遊びに応じどのようなイメージでやっているか、色々な言葉や表現する方法を考え、より楽しめるように、A男や一人一人が『どんなふうどんな思いでやっているか、何を楽しんでいるのか』を理解して関わっていくようにする。

4. まとめ

- 4歳児の保育事例（ビデオ）を通して、一人一人のしぐさや表情等をじっくり見て、行動や言葉を読み取り個々の内面を探っていくことで、子ども達がどのような思いで遊びに取り組んでいるかがよく分かった。一人の幼児と周りの子どもたちの様々な関わりを見ていくと、友達との関係性・主体的に遊べた要因、どのようなことが考えられるかが明確になった。
- 後日、担任との話し合いで保育者の言葉がけでは「子どもの思いに共感して遊びのイメージを大切に関わっているか？」や「保育者が見通しのよい部屋作りをして、ついたてや仕切りをうまく使って環境構成が出来ているか？」等の話し合いをした。楽しんでいた遊びが途中で変わっても保育者の思いと子どもの思いをすり合わせていき、指導型の保育にならないような遊びへと日々工夫して考えていく必要があると思われた。
- 一緒に遊んだり生活を営む中で、子どもの興味や関心をもとに、一人一人が意欲的に遊び、自信を持って生活することが出来るように、それぞれのよさを認めたり褒めたりしていくことが大切であると考えた。信頼関係をしっかりと築き必要な経験が得られるようにしていくために、教材研究や他のクラスとの連携、用具などの準備や安全に過ごせるための環境づくりをし、毎日の保育では、ねらいや内容、環境構成や援助が適切であったか等に焦点を当て、反省評価を繰り返し明日の保育へつなげていきたいと思う。



## 高岡支部 四万十町立幼保連携型認定こども園たのの

研究主題 「5領域を通して育まれる幼児期の終わりまでに育ってほしい姿につながる保育のあり方（幼児理解をもとにして探る）」

### 1. 研究にあたって

今年度は、日々の保育の中で子どもの興味や関心はどこにあるのか、今何を体験しているのかを保育教諭が理解していないと、それに応じた環境構成や援助はできないのではないかと考えた。そこで、幼児理解の必要性について共通理解を行い、4歳児の研究保育を通して職員全体で多面的に子どもの姿を捉え、「5領域を通して育まれる姿」の視点から必要な援助や環境構成について考えていきたい。

### 2. 研究の進め方

今年度は4歳児の研究保育を通して、以下の視点から考察を深める。

- ◆どのようなことに興味、関心をもって関わり、どのように遊んでいたか。
- ◆どんなところに楽しさを感じていたか。
- ◆その姿につながった、環境構成と援助を考える。

KJ法で視点に沿って協議を行う。子どもの内面を理解しその姿が幼児期の終わりまでに育ってほしいどの姿につながっていくのか考察した。

### 3. 研究事例

第1回研究保育 10月28日（水） 4歳児・そら組（男児1名、女児6名 計7名）

そら組のねらい（○）内容（●）

- 友達と一緒に、のびのびと体を動かしながら遊ぶことを楽しむ。
- 友達や異年齢児と、サッカーやドッジボールなど体を動かして遊ぶ。
- 自分の思った事や感じたことを、言葉で伝えたり友達のことを聞いたりしながら遊ぶ。

#### 【ドッジボールの場面より】

4歳児と担任で転がしドッジボールをしていた。2回戦が終わると、①ドッジボールをしていた年長児数名が転がしドッジボールをしていたE男に「ねえ、ドッジボールやらん？」「一緒にやろう」と呼びにいった。E男はにこにこした表情で「え。いいよ」と年長児と手をつないで行き、ドッジボールを始めた。年長児がチーム分けをしている時はその様子を見て、「E君こっちのチームね」と男の子のチームに入ってゲームを始めた。②2回戦が終わるとE男は担任を呼び、手を引いて「ねえY先生一緒にやろうよ」「ねえ一緒にしようよ」と何度も手を引いては呼んだ。担任がドッジボールに入ると「やったー」とまたドッジボールを始めた。③E男は「よけるのうまいろ」と担任に言い、ボールから逃げるのが楽しい様子だった。そのうちに④当てられるが、にこにこ外に出た。来たボールを年長児と一緒に走って追いかけるが、なかなか取れず投げることは出来なかった。そのうちに外側の子どもがE男一人になると自分でボールを取り投げた。何度かやっているうちに⑤担任にボールが当たり、すごくいきいきとした表情で、「よっしゃ！」と喜んだ。年長児から「E君すごい！」「うまい！」



とわれうれしそうな表情でうなずいた。⑥その後も積極的にボールを取りに走っていき、投げた。ゲームが終わったところで担任が砂場の方に向かっていくと、また⑦「ねえもう一回しようや」「ねえこっちきて」と再び手を引っ張りドッジボールの方に向かった。⑧年長児がチームを決めている時はじっと様子を見て、「E男君こっちね」と年長児に手を引かれ、言われるとうつむいた。その様子を見た年長児が「E君こっちがいいが？」と言うと「うん」とうなずき顔をあげ、年長の男の子がいるチームに入ってまた、ゲームを始めた。

5領域では

- ・下線①より、E男は教師や友達と触れ合い、安心感をもって生き生きと活動に取り組んでいる。自分が受け止められているという思いを感じて自ら周囲との環境に関わっていると思われる。 …… 健康・環境
- ・下線①、②、③、⑦より、遊びの中で人と関わり、したいことや、感じたこと、してほしいことを言葉で表現している。 …… 言葉・表現
- ・下線③、④、⑥より、ドッジボールで楽しい経験をし、興味、関心をもってボールから当てられないように逃げることを楽しみ、当てられると外に出て自らボールを取りに行き当てたいと思う姿など、十分に体を動かしていた姿が見られた。 …… 健康・表現
- ・下線⑤より、自分は認められているという体験を通して、自信をもって行動することができるきっかけになったのではないか。 …… 人間関係・表現
- ・下線⑧より、自分の考えで行動し、思いを受け止められ、自分や相手に気付いていくという体験をしている。 …… 人間関係・表現

経験していることは

10の姿の視点で見ると

<ul style="list-style-type: none"> <li>・保育者や年長児と一緒にすることが楽しい。(下線②⑦)</li> <li>・年長児の男の子に誘われて嬉しい。(下線①)</li> <li>・先生と一緒に嬉しい。(下線②⑦)</li> </ul>	<p style="text-align: center;"><b>協同性</b></p> <p>保育者との信頼関係に支えられ、主体的に行動している。先生と一緒に嬉しい。「先生や友達と一緒にもっとやりたい」という気持ちの芽生え。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の思いを言葉で伝える。(下線③⑦)</li> <li>・繰り返し先生を誘い、一緒にすることがうれしい。(下線②⑦)</li> </ul>	<p style="text-align: center;"><b>言葉による伝え合い</b></p> <p>自分の思いや考えを相手に言葉で伝えようとしている。</p> <p style="text-align: center;"><b>健康な心と体</b></p> <p>心が満足していて次への意欲につながっている。</p> <p style="text-align: center;"><b>自立心</b></p> <p>自らやりたいことに向かって、動こうとしている。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・おもいっきりよけること、逃げるのが楽しい。(下線③⑤)</li> <li>・ボールを追いかけ、相手に向かって投げることが楽しい。(下線③④⑤)</li> </ul>	<p style="text-align: center;"><b>健康な心と体</b></p> <p>ボールの動きを見て即座に対応する姿や、自分の体を意識し、ボールをよけたりキャッチしたりして多様な動きを経験して体をコントロールしていく面白さをあじわっている。</p> <p style="text-align: center;"><b>道徳性・規範意識の芽生え</b></p> <p>ルールの理解をして当たったら外にでるなどの決まりの必要性をわかっている。</p> <p style="text-align: center;"><b>自立心</b></p> <p>自らやりたいことに向かって、動こうとしている。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・年長児に認めてもらうことが嬉しい。(下線⑤)</li> <li>・年長児の男児と同じチームでやりたい。(下線⑧)</li> </ul>	<p style="text-align: center;"><b>社会生活との関わり</b></p> <p>年長児の男の子とやりたいという年長児への尊敬や憧れの気持ちが生まれている。</p>

[協議より]

E男の育ちを考えた時に転がしドッジボールだけでは満足しなかったのではないか。

一人一人の育ち、発達が違う。一人一人のルールを理解度が違う中でやっていた。

ドッジボールを年長児と一緒にした経験があり、年長児が遊んでいるコート of 広さでもボールが投げれることを分かっていたのではないか。また、年長児もE男がボールを投げる力もあり、ルールの理解もしているので、年長児と対等に勝負ができることを知っていたので誘ったと思われる。

E男は担任の先生に自分を認めてもらい満足したのではないか。

年長児や先生に認めてもらうことで自己肯定感が育つ。

先生を当てたことで年長児に褒めてもらったので、また先生と一緒にやりたいという気持ちになったと思われる。保育者は砂場にいたがE男の要求に答える必要性を感じたため、ドッジボールに行くことにした。その背景には、職員間の連携、みんなが見守ってくれるという安心感があり、担任がドッジボールに参加できた環境が良かったのではないか。

明日につなげるために

- ・ドッジボールと転がしドッジボールが行き来できる場を作り、年長児が転がしドッジボールに入り、転がしドッジボールでそれぞれの機会を作ってみてもよい。
- ・ルールの方に思いを置かずに、一人一人のルールを理解度や楽しんでいる所は違うので、ルールの必要性を子どもが感じた時に、一緒に考え作っていく。
- ・誰かがやめたら、できなくなるという小規模園の困難さがある中で、やめたい子、続けたい子の気持ち、両方を考えていくことも必要である。

#### 4. まとめと今後の課題

今年度は公開保育の研修会に初めて参加する保育教諭が多く、公開保育前日までに日々の保育の中で見る視点などの学習をしておくという課題を見つけることができた。園内で協議したことは、子どもの姿を通して職員の意見を聞くことで、保育を見る視点の幅が広がり自分の保育の気付きにつながった。

また、各園でまとめることによって子どもの日々の姿から内面を理解し、それぞれの園の特色を生かした良さが見えてくるのではないかと考える。

これからも、子どもの姿を話し合い職員間で共通理解し幼児理解を深めていきたい。そのためには、ビデオを利用したり担任の思いなども聞いたりしながら、同じ場面を見合えるように園内研修の方法を工夫していきたい。

## 編集後記

本年度も諸先生方のご協力をいただきまして「幼稚園教育のあゆみ その46」を発行することができました。今年度は、研究テーマを「5領域を通して育まれる幼児期の終わりまでに育ってほしい姿につながる保育のあり方（幼児理解をもとに探る）」としました。

「幼児期までに育ってほしい姿」は、これまでも大切にしてきた健康・人間関係・環境・言葉・表現の5領域を通して育まれます。保育の基本は5領域であることをおさえ、幼児をどのように理解したかで環境構成や援助のあり方も異なってくると考え、幼児理解を基に実践事例を通して研究に取り組んできました。

本年度は、コロナウイルス感染症のため、各園での公開保育や協議が、感染予防のため少人数で行われたり、支部での話し合いも例年のように集まってすることが難しかったりしたため、各園で実践の研究資料をまとめ、各支部では共通したことをまとめるという形をとることになりました。

昨年の課題にあった子ども同士の細かいやり取りや遊びの流れの記憶があいまいにならないように、事実を正確に捉える方法として、遊びの様子を動画でとり、多くの目で見て考え、子どもの今の育ちをより正確に捉えることができた園も多くあり、保育の振り返りや実践を向上させていき、先生方の学びにつながったのではないかと思います。それぞれの園で工夫しながら研究を進め、考えを練り合い事実を拾い上げながら、専門性を高め合うことの大切さを学びました。

発刊にあたり、皆様のご協力に感謝し、このあゆみが諸先生方や各支部において活用されることを期待し、一層のご指導を賜りますよう、よろしく申し上げます。

令和2年度 幼児教育のあゆみ その46

### 高知県国公立幼稚園・こども園会

責任者 西田佳代

連絡先 〒781-2116

高知県吾川郡いの町柳町12

いの町立伊野幼稚園

TEL 088-892-1428

FAX 088-892-1428

発行日 令和3年3月31日